
ポケモン救助隊 エルドラク＝ブレイブ ～緋龍の勇者～

橘 紀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ポケモン救助隊 エルドラクレイブ 〈緋龍の勇者〉

【Nコード】

N3568W

【作者名】

橘 紀

【あらすじ】

不思議な生き物「ポケモン」だけが住む世界、「アナザー」。自然災害が多発しているこの世界では、救助隊と呼ばれるポケモンがいたるところで活躍していた。そんな中、駆け出し救助隊「エルドラクレイブ」はある朝、緋色の流れ星を目撃する。この些細で非日常的な出来事が、世界の運命を変える引き金となる……………

プロローグ（前書き）

はじめまして、橘 紀と申します。

この度はこの物語のページを開いていただき、ありがとうございます！

拙い文章ですが、それでも楽しんでいただければ幸いです。

それでは、どうぞ！

プロローグ

どこまでも深く生い茂る森、どこまでも大きく広がる海、どこまでも高くそびえる山。そんな自然豊かな世界に住む者達は、この世界を「アナザー」と呼ぶ。

人間は一切存在せず、代わりに「ポケモン」と呼ばれる不思議な生き物達が暮らしている。ある者は自慢の脚で大地を駆け、ある者は深い海を優雅に泳ぎ、ある者は果てしなく広がる空を飛び回り、またある者は、誰にも知られることのない「神域」とも呼べるような地で、ひっそりと生を営む。さらに、ごく少数だが、ある一か所の土地に集まり、町を興して賑やかに暮らす者もいる。

余程のことが無い限り、争い事もなく、ポケモン達は平和な時間を享受し続けていた。———つい最近までは。

朝、いつものように目を覚まし、ふと目に飛び込んでくるニュースの大半が、台風や山火事などといった自然災害の話題で占められているという生活が毎日続くなんて、想像できるだろうか。現在「アナザー」では、今述べたことが実際に現実となって起こっているのだ。この瞬間にも、「アナザー」のどこかでは大竜巻、またどこかでは落雷、また別の場所では地割れが発生し、連日多くのポケモンが傷つき、命を落としている。皆、生きた心地がしないまま時を過ごしているのだ。

———しかし最近、災害の被害に遭うヒトびとが、少しずつだが減り始めてきていた。「救助隊」という存在によって。

災害がいつ起きてもおかしくない世の中となってしまうた今、ポケモン達だってただ怯えているだけではない。その災害から少しで

もヒトの命を救いたいという願いから始まったのが、救助隊という職業なのだ。災害の規模拡大を食い止めるチームもあれば、被害にあったポケモンからの要請を受け、救助に行くチームもある。いずれにせよ、救助隊は誰もが憧れる存在なのだ。

これは、絶え間なく続く自然災害に立ち向かう、とある救助隊の物語――

プロローグ（後書き）

いかがでしたでしょうか？

トラブルもありましたが、何とか無事に終わって作者一安心です。
こんなので今日中に第一話投稿できるのかしら。

まあ、何とか頑張ってみます。

それでは、また会いましょう♪

キャラクター紹介1（前書き）

第一話に入る前に、救助隊「エルドラクⅡブレイブ」の簡単な紹介をば。

本編の核心を突くネタバレ要素は（多分）入っておりませんので、安心してお読みくださいませ。

キャラクター紹介1

名前…リュウ（アチャモ）

性別…男

年齢…自称十五歳（記憶を失っているため不明）

一人称…オレ

本編の主人公。記憶を失い、ポケモンになってしまった人間の少年。

「小さな森」で目覚めた時に出会ったキトラ、サジェッタと共に救助をしたことがきっかけで、救助隊「エルドラクIIブレイブ」に誘われる。

ポケモンという生き物が何たるかも知らず、見たこともないポケモンに出会うたびに驚くか気絶するかかの反応を見せる。当然知識も乏しいため、戦闘は不慣れ。

性格は少々小生意気で、気取った口調で話すのが特徴。気に入らないと判断すれば、相手が背が高かろうが年上だろうが上から目線で物言いする。だが、根っからの嫌なヤツではなく、仲間思いなところもあり、たいていのヒトには普通に接するし、救助に行くときも割と一生懸命。物覚えが非常に早く、手先も起用。

戦っている時に時々放つ緋色の炎は、何らかの力を秘めているらしいが、本人もその実態は知らない。……まあ、記憶を失っているのだから当たり前。

頭に鮮やかな緋色のバンダナを巻いている。

名前…キトラ（ピカチュウ）

性別…男

年齢…十四歳

一人称…ボク

救助隊「エルドラクⅡブレイブ」の副リーダー。

リュウと共に「小さな森」で救助をし、その才能を見込んで彼を「エルドラクⅡブレイブ」に誘う。

ポケモンに関する知識のないリュウに様々なことを教える保護者のようなサポート役。バトルの腕はなかなかのもので、持ち前の電気技で一気に相手を一掃するのが得意。

一途な頑張り屋。どんな困難にも臆さない気丈な性格だが、お化けや怪物といった得体のしれないモノが大の苦手。あと、「ネズミ」と呼ばれることを非常に嫌っている。

自然災害で両親を亡くしているという過去を持つ。が、彼の明るい性格も手伝ってか、今は「サルベージタウン」の皆が家族同然の存在になっている。

一種のオシヤレなのか、右手首にミサンガをつけている。

サジェッタ（ピジョン）

性別…男

年齢…十五歳

一人称…俺

救助隊「エルドラクⅡブレイブ」のリーダー。

自然災害で両親を亡くし、同じ境遇である幼馴染のキトラと共に救助隊を結成する。が、駆け出しのためなかなか救助依頼が来ず、偶然出会ったリュウを嫌々ながら救助隊に入隊させる。

流石リーダーを担当しているだけあって、戦いの実力はかなりのもの。飛行スピードもずば抜けて速く、半径二千キロ圏内であれば一日足らずでそこに辿り着く。

口数が少ないわけではないが、性格は無愛想。ちょっとやそつのことじゃ表情すら変えないほど凶太い。あまり他人から好かれるようなヒト柄ではないが、一応ヒト並みの優しさはある……はず。

リュウのことは少々嫌っているが、彼の謎解明には割と協力的に

なっている。その裏にはある人物の存在があるようだが、真相を知っているのは今のところ彼しかない。リュウの操る緋の炎についても何か知っているらしい。

オシャレには全く興味を持たず、ドーピングは性に合わないのか、装備品やアクセサリは一切付けていない。

> i 3 2 2 1 7 — 4 0 5 9 <

キャラクター紹介1（後書き）

以上が、救助隊「エルドラクⅡブレイブ」の愉快的仲間達です。
次回からいよいよ第一話！お楽しみに！

第一話 新米救助隊と緋い流れ星（前書き）

やっと第一話。ふいゝ。

第一話 新米救助隊と緋い流れ星

ポケモン達が住む世界、「アナザー」。

相変わらず自然災害が多発しているが、それに比例して、ヒトびとを助けるための救助隊も年々その数を増していった。全国の救助隊を総括する「ポケモン救助隊連盟」も、連日飛び込んでくる救助隊登録要請にもうてんやわんやな状態だ。まあ、いいことなのだが。さて、ここにもポケモン救助に勤しむ救助隊が……

「うあああっ！ 今日も依頼状一通も来てない！」

※ここで訂正です。先程「ここにもポケモン救助に勤しむ救助隊がいた。」と言いかけてましたが、「ここにもポケモン救助をしようにも依頼が来ない救助隊がいた。」の誤りでした。深くお詫び申し上げます。

「お詫びしなくていいよっ！ どーしよお……これじゃまた何もしないで一日過ごすことになっちゃうじゃないかあ！」

誰に向けてでもなく、天に向かって嘆きの言葉を放り投げる一人のポケモン。先端が黒く染まった長く黄色い耳に、真っ赤な両頬。そして稲妻を彷彿とさせるギザギザの尻尾を持つ、ピカチュウと呼ばれる種族だ。中身が見事にすっからかんのポストを目の前にして、深くため息を吐きながらペタリと座り込む。

それでも、頭上でバサバサと羽ばたく音は聞こえた。元氣なく垂れ下がった耳をピクンと動かし、ピカチュウは天を仰ぐ。程なく、ピカチュウの身長のお二倍くらいはある鳥ポケモンが、大きく旋回しながら地面に降り立った。一本だけ撥ねた赤い鬣、赤と黄色の尾――ピジョンである。

「さ、サジェッタ」

「キトラ、依頼のほうは……って、その顔だと今日もハズレか」

キトラと呼ばれたピカチュウは暗い顔のまま頷いた。サジェッタという名を持つピジョンも、手（翼？）を頭に当て、やれやれと首を振る。

「……まあ、救助隊といっても結成したばかりだし、八日目の正直でもうじき来るでしょ、依頼の一通くらい」

「そう言って開き直り続けて七日経ってるんだぞ？早いとこ依頼の一通くらいこなさないとこのままじゃジリ貧だ」

もうすでにお互い貧乏なんだがな……と、どうでもいいように付け加えるサジェッタ。強いて気を取り直そうとしていたキトラも、耳どころか尻尾まで地面にへばるくらいに項垂れてしまった。

「うう……でも今から連絡所行ったらって、もう掲示板の依頼全部取られてるだろうし……」

ホントにどうしよう……面と向かってサジェッタにそう言おうと顔を上げるなり、キトラは目を丸くして固まってしまった。もちろん、寝起きで寝ぼけ眼のサジェッタの顔を見て驚いているわけではない。彼の肩越しから見える空にある、とんでもないモノが目飛び込んできたからだ。サジェッタもキトラの驚き顔に気付き、ぼんやりとその視線を追って振り返る。

「……なんだ、ただの赤い流れ星じゃないか」

「こんな朝っぱらから流れ星が見えて何で驚かないの？しかもアレ、真っすぐ近くの森に向かってるじゃない！」

キトラの言う通り、真っ青な空の中を真っ赤な尾を引いて横切る流星は、キトラとサジェッタのすぐ近くにある森に墜落しようとしていた。そして、

「うわうわわわうわわわわ！」

流星が森に飛び込んだ瞬間、鋭い地響き、さらに大爆発が同時に起こった。地震に弱いが故に派手にすっ転んだキトラの尻尾を、サジェッタが足で掴み大空へ舞い上がる。その下で、爆発に驚いたポケモン達が、慌てて爆発から逃れようと空や地面を駆けていく。

「やれやれ、初めての救助の場所は隕石落下現場か。仕事しなくても顔くらい出せば明日の新聞のトップ記事に載りそうだな、俺達」

「そんな悠長なこと言ってる場合じゃないでしょ！被害が大きくなる前に早く行こう！」

尻尾を掴まれ宙ぶりの状態で、キトラが声を張り上げて怒鳴る。
はいはい、わかったよとサジェッタも返事をして、隕石落下現場――「小さな森」へと向かっていった。

「小さな森」はその名の通り、「アナザー」に数多くある森と比べると、林以上森未満と表現したほうが正しいと思うほど最も小規模な森である。この森を住処にするポケモンも少なく、何よりあんなに目立つ流れ星だったせいか、負傷者はおろか逃げ遅れたヒトは全くと言っていいほどいなかった。ただ、さすが隕石と言うべきだろう。何本もの木が跡形もなく吹き飛ばされ、地面には綺麗な円形のクレーターができていた。上空から入念に辺りを見回して怪我人

がないことを確認し、サジェッタの“かぜおこし”で朦々と立つ砂煙を払いながら、キトラ達はクレーターの中心部に少しずつ近づいていった。ヒト一倍視力と聴力の良いキトラが首をのぼし、砂埃が晴れて見通しの良くなったクレーターを覗き込むと、

「ひゃああああ！ ぽ、ポケモン………！」

図太いサジェッタも驚くほどの悲鳴を上げた。キトラの指差す先には、確かに小柄なポケモンらしきヒト影が、ぐったりと横たわっている。サジェッタはすぐさま“かぜおこし”を繰り出し、完全に辺りの様子が見えるまで砂埃を吹き払うと、キトラが地面に降り立ってポケモンの容態を調べた。三本に分かれた黄色い鶏冠、オレンジ色の身体の首周りにはふわふわの黄色い羽毛が生えている。ひよこポケモンのアチャモだ。

辺りに岩などが転がっていないことから判断すると、信じがたいことだが、このアチャモが流れ星の正体なのではないかという仮説が浮かび上がってきた。もしそうだとしたら相当酷い怪我をしている、下手したら死んでいるかもしれないはずなのに、当のアチャモは砂に塗れているだけで傷は一つも付いていなかった。それでもキトラは用心を重ね、懸命に呼びかけてアチャモの意識の有無を確認める。

「ねえキミ、大丈夫？ 死んでるなら返事して！」

逆だろ、とサジェッタが小声でツツコミを入れた。

しばらく呼びかけていると、アチャモの瞼がピクリと動いた。次いで呻き声を上げながら、円らで丸っこい目を開く。

「やった、気が付いた。よかった………」

瞼が完全に開いても、焦点を結ばずにアチャモはぼんやりと虚空を眺めていた。そして、やっとこさキトラとサジェッタの姿を確認した瞬間、

「うわあああああああ！」

ものすごい奇声を発してもものすごいスピードで後ずさりした。この反応にキトラはもちろん、サジェッタも目を点にして嘔然としている。

「あ、あの、君……大丈夫？」

色んな意味で……と後につけようとした言葉を飲み込み、キトラが声をかけてみる。相手のアチャモは返事をするどころか、先ほどよりもましてショックを受けたらしく、さらに一オクターブくらい高い奇声を発した。

「うわあああ！ね、ね……ネズミが喋ってる！」

「ね、ネズミ……？」

ピカチュウという種族名で呼ばれるならまだしも、ネズミ……？キトラの頭の中で、何かがブチッ！と切れる音がした。それにも気付くことなく、アチャモは依然として同じテンションのまま言葉を発する。

「言葉を話す黄色いネズミって……なんだよアンタ、宇宙人？」

「……俺達からして見れば、お前の方が宇宙人に見えるんだけど」

わなわなと震えているキトラに代わって、サジェッタが受け応える。アチャモはサジェッタの方を見、キトラの時のように奇声は

発しなかったものの、茫然としてこれだけ言った。

「うーわ、デカイ鳥……」

後にも続けようとしたが、アチャモの耳に聞こえるほど大きく何かがブチ切れる音が聞こえたので、慌ててそのまま口を閉じた。ようやく怒りを抑えたキトラが、相手を刺激しないように事情を聴く。どうやらこのアチャモ、ポケモンのくせに「ポケモン」とは何たるかということとを全く知らないようなのだ。これまでの経緯も含めて、聞くのも言うのも恥ずかしい一般常識をできる限り多く説明すると、物分かりがいいのか、一回聞いただけでアチャモは大体のこととは理解したようだ。相変わらず怯えているようだけれど。

「……なるほどね、キミ達は『ポケモン』という生き物で、その黄色いネズミ君がピカチュウっていう種族のキトラ君。そっちのデカイ鳥君がピジョンっていう種族のサジェッタ君というわけか」

「……あんまりネズミって言わないでほしいな」

「次『鳥』って言ったら地面に埋めるぞ」

一方から怒り半分の懇願、もう一方から文字通りの脅しを受けて、アチャモは慌てて謝った。

「そしてオレはというと、赤い流れ星になって地面に激突して、無傷の状態のままここにいてわけか……しかも、こんな姿になって」

半ば独り言のように聞こえる言葉を呟きながら、アチャモは怪訝そうに自分の身体を眺めまわした。時折火を噴いては目を丸くしている。元からそう見えるけど、傍から見たらより一層変人に見える。それでもキトラは、アチャモが最後に言った不可解な言葉を聞き

逃さなかった。

「ち、ちよっと！『こんな姿』ってどういうこと？」

「…オレ、こう見えても元は人間だったの。名前は『五十嵐 龍』
っていうんだけど」

アチャモ、基「五十嵐 龍」が言葉を切ってから、三十秒間沈黙
という名の沈黙が流れていった。キトラは何を聞いていいか戸惑っ
ているし、サジェッタは半ば不審そうな眼で睨んでいるし、「五十
嵐 龍」は二人の反応を待っている。ややあって、キトラが口を開
いた。

「ええと……イガラシ……リュウ君？」

「リュウでいいよ、長いだろ？」

「じゃ、リュウ君。君さっき、『もとは人間』って言ったよね？」
「言ったよ」

先程とは打って変わって、淡々と答えるリュウ。

「そう……聞き間違いじゃないんだね。嘘ついてないよね？」

「ついてないよ。初対面のヒトに嘘ついたら嫌われるじゃないか」

アンタはもうすでに二人のポケモンに嫌われています——サジ
エッタは心の中でそう呟いた。話題の手札が尽きたのか、キトラが
困ったように耳を引っ張りながらサジェッタの顔を仰ぐ。サジェツ
タをそれに気付き、少し考えてから口を開いた。

「とりあえずアンタを元人間と認めて聞くけど、何しにこの『アナ
ザー』へ来た？もしよからぬことを考えているなら『鳥』って言わ
なくても地面に埋める」

「（この鳥はヒトを地面に埋めるのが好きなのか…？）」

この感想を口に出さずに置いておいて、リュウは数分間しきりに何かを考え込んだ。時間が経つにつれ、眉間の皺が深くなっていくのが自身でもわかる。

「分からない」

「は？」

「今ずっと、自分のことを思い出そうとしたんだけど、『元人間』と自分の名前しか頭に浮かんでこなくて…何か企む以前に、今までどこで何をしていたのかも全然思いだせないんだ」

キトラとサジェッタは顔を見合わせた。いわゆる、記憶喪失というやつだ。リュウの言葉、表情から見ても、自分達を騙そうと嘘をついているようには到底思えない。それでもサジェッタは、まだ疑いの目をリュウに向けていた。

「ここまでいっても、信じてもらえない？」

「五分五分。真っ向から信じる気は毛頭ない」

「あっそう、それじゃあここでお別れだね。ちょうど今思い出したこともあったし…」

じゃあね。こう別れを告げて、リュウは駆けだした。途中でふと立ち止まり、何かを探すように辺りを見回して、探し物が見つかったのか一直線にそこまで駆けて行くのを、キトラもサジェッタもただ眺めているだけだった。

「さ、サジェッタ…いいの？あのまま放っておいて」

「別に。アイツ記憶喪失なんだろう？何かする様子もなさそうだし、俺としてもあんな奴と関わり合いになるのはゴメンだ」

「(まだ『鳥』のこと根に持ってるのかな……)でもさ……」

やっぱりボクは放っておけないよ———そう続けようとした時、恐らく今日一番と断定してもいいくらいにサジェッタが驚きの表情を見せた。流れ星の時とは逆に、キトラがサジェッタの視線を追う。

「お、おい待て！そのバンダナは………！」

地面を蹴って羽ばたくサジェッタが向かう先には、赤よりも鮮やかな緋色のバンダナを持っているリュウがいた。すでに結び目が作られており、後は頭にかぶるだけで手のないアチャモでも簡単に頭にバンダナが巻ける。バンダナを被ったリュウはサジェッタに気付くなり、敵意をむき出しにして怒鳴った。

「なんだよ！信用できない奴と話しても楽しくないだろう？」

ぷいと顔をそらし、リュウは森の奥へ引っ込んでしまった。サジェッタは深追いすることなく、口を半開きにして啞然としている。脳内では、先ほど見たバンダナ姿のリュウの映像が繰り返し再生されていた。

「(あのバンダナ……まさか、あのアチャモが………?)」

考え事に夢中だったせいだろう。刻々と大きくなっていく地響きにも、サジェッタが気づくことはなかった。キトラが急いでサジェッタに駆け寄りながら叫ぶ。

「サジェッタ、地割れだ！早く飛んで！」

サジェットが我に返った瞬間、その足元に地面に大きな亀裂が入った。

第一話 新米救助隊と緋い流れ星（後書き）

ここまで読んでくださりありがとうございます！

さあ感想欄その他諸々を直さねば……なんと幸先の悪い。

こんなダメ作者を心の中でもいいので応援してやってください。

第二話 地割れの底に潜むもの（前書き）

初めての感想もらってテンションあがって描いた第二話です。

第二話 地割れの底に潜むもの

緑の美しい木々が何本も、突如発生した地割れによって根こそぎ奈落の底へ吸い込まれていく。キトラ達もその巻き添えになりかけたが、サジェッタが咄嗟にキトラを背に乗せ、翼の一振りで大空へ舞い上がりなんとか事なきを得た。地割れはものすごいスピードでその懷を広げ、やっと地響きが収まった頃には、今飛んでいるこの場所でも25メートルの幅はありそうなほどになっていた。

「酷いね、これは……」

地割れに沿って滑空するサジェッタの背から、キトラがひょっこりと顔を出して地割れの底を眺める。今日災害が多発している「アナザー」にとって、地割れは決して希有なものにはなっていないが、今回の地割れは稀にみる大規模なものだった。裂け目の淵から地面が削れ、重力に従って地底の暗闇へ落ちてゆく。

比較的足場がしっかりしていそうな場所まで飛んで、サジェッタは翼をたたんだ。キトラが慎重に地割れの淵まで歩き、首をつっこんで耳を澄ませる。地割れに巻き込まれたヒトがいるかいないかを確認するためだ。

「さっきの流れ星騒動で大半のヒト達がこの森を離れたから、巻き込まれたヒトはそう多くはないだろう。どうだ？ 誰かの声とか聞けるか？」

「……ダメ、深すぎる。風の音しか聞こえないや。もっと奥までいかない……」

キトラが言葉を続けようとした、その時。

「誰かああああ！助けてええええええ！」

狂ったような女性の悲鳴が聞こえ、キトラが顔を上げると、いきなりその顔に何かがへばりついてきた。

「うわわわわ！」

驚いて崖から転がり落ちそうになるキトラを、サジェッタが翼をストップパーにして止めた。

「あ！ご……ごめんなさい！」

悲鳴の主は我に返ったのか、キトラの顔から飛びのいてしきりに頭を下げながら謝った。蝶に似た容姿を持つ、バタフリーというポケモンだ。薄く白い羽が羽ばたくたびに、微細な鱗粉が舞い上がる。

「ゲホゲホッ！ど、どうしたんですか………？」

先程の正面衝突で顔についた鱗粉を払い、バタフリーが巻き起す鱗粉で咽ながらキトラが聞いた。相手は慌てるあまり、しばらく戸惑いを隠しきれない顔で右往左往し、数分たってようやく落ち着き、口を開いた。

「申し遅れました。私、この近くで果樹園を経営しているルースというものです。さ、さっきの地割れで、私の息子が………」

そこから先は、キトラとサジェッタでも容易に想像できた。逃げ遅れ、地の底に落ちてしまったのだろう。そこそこ鍛えられたポケモンなら、高い所から落ちても受け身をとることで無傷でいられるが、目の前にバタフリーの見た目年齢からして、彼女の息子はきつ

とまだ幼い。仮に外傷はなくても、自力で地上まで這い上がることは不可能だろう。

「もう私、どうしたらいいかわからなくて……………このままじゃトーチが……………イヤアアア！」

（当たり前だけれど）余程息子が心配なのか、突然バタフリーは糸が切れたように叫びだし、そこら中に糸を巻き散らかし始めた。

「やれやれ、このご婦人の方が自然災害よりも厄介だよ」

時折降りかかってくる糸を翼で払いながら、サジェッタが鬱陶しそうに呟いた。

「キトラ、そのトーチとかいう息子さんはお前が助けに行つてやつてくれ。俺はとりあえずこのご婦人をなんとかする」

「……………うん、わかった」

キトラはようやく顔についた鱗粉を取り除き、サジェッタからプラスチック製の道具箱を手渡されると、何の躊躇いもなく地割れに飛び込んだ。

所変わって、ここは地割れの底。

ここから地上までどのくらい距離があるのか、想像もつかない。首が痛くなるまで見上げても、見えるのは稲妻ぐらいの大きさしかない裂け目だけである。

なんだか面倒なことになっちゃったな……………と、地割れの底を歩きながらリュウはため息をついた。キトラやサジェッタと別れ、当てもなく走っていたら突然足元が真っ二つ。あっけなく裂け目に吸い込まれて地面に激突する前に咄嗟に火を吹き、ジェット噴射の要

領で衝撃を和らげて大怪我は避けられたものの、脱出策も思いつかずこうして時間を潰すしかなかった。

しかもリュウにとって一番の脅威となるのは、時々襲い掛かってくるポケモン達。恐らくリュウと同じく地割れに巻き込まれた連中なのだろうが、こちらに気付くなり目の色を変えて襲い掛かってくるのだ。普通のポケモンなら、ああポケモンかと思って戦うか逃げるか落ち着いて考えることができるが、如何せんリュウは「ポケモン」という生き物も知らないのに何故かポケモンになってしまった身。襲いかかるポケモン全てが化け物にしか見えなかった。

とりあえずポケモンに出会ったら顔を見る前に火を吹いて倒す。人間の世界では間違いない犯罪だと思われそうだが、こうでもしないと自分の身（&精神）が危ない。サジェッタよりも小柄な鳥ポケモンであるポッポを倒し、少し休もうと腰を下ろすと、奥の方で爆発音が響き渡った。

「なっ、何だ？」

目をやると、朦々と立ち込める煙とともに、何かがバチバチはじける音が聞こえる。リュウは飛び起きて壁沿いに走り、岩陰に隠れて様子を窺った。すると、

「“でんきショック”！」

キトラの声。それと同時に、キトラの赤い両頬から電流が迸り、一気に数匹のポケモンを黒焦げにした。現実を超越した出来事を一度に見てしまい、リュウは目を回して倒れそうになったが、よく見ればポケモン数十人に対し、キトラは一人で戦っている。強力な電撃で確実に一人一人仕留めてはいるけれど、あれではキリがない。―――これって、助けるべきだよな？ やっぱり。

そう思った瞬間、体が勝手に動き出し、気が付けばあれだけ大勢

いたポケモンを炎で一掃していた。思わぬ加勢に驚いたのか、キトラが目を皿のように丸くして茫然と立ち尽くしている。ポケモン達が皆気絶しているのを確認してから、リュウはキトラのもとへ駆け寄っていった。

「キトラ、大丈夫かい？」

「え？ ああ、うん。ありがと……」

空気の抜けたような声で礼を言うキトラ。ただ火を噴いただけでこれといったすごいことはやっていないのだが。リュウは気まずそうに頭を掻——けなかった。そういえば、手が無いんだっけ。首周りに生えている黄色い羽毛がパタパタと動くだけだった。

「つていうかりゅう、なんでこんな所にいるの？ もしかして地割れに巻き込まれた？」

「（気付くの遅いよ……）……うん。そうなんだけど」

「そっか。ちょっと待っててね」

そう言うキトラは、踵を返して走っていった。「待て」とは言われたが、リュウは無意識にキトラの後についていく。そして再びキトラの姿を確認した時、自然とその足が止まってしまった。

そこにいたのは、たくさんのポケモン達。リュウの場合、本来なら驚いて声を上げるか何かするが、それをする余裕など全然なかった。ほとんどのヒトびとが壁に寄り掛かるようにして座り、ぐったりとしている。母親の名前を呼んでいる幼い子供もいれば、酷い傷を負って倒れている者もいた。地割れに巻き込まれて地面に激突し、怪我を負ってしまったのだろう。とても姿を見ただけで気絶するような笑える状況ではない。

キトラはその中の一人のそばに駆け寄り、励ましの言葉をかけた後、肩にかけてある道具箱の中から何かを取り出した。卵型をして

いて、羽根の形をした板が左右に付いている。

「あれ、リュウ。ついてきたんだ」

リュウが駆け寄る前に、キトラが一足早くリュウの存在に気付いた。そういえば、「ここで待ってて」なんて言われていたんだっけ。

「何だい、それ？」

「このバッジ？エヘヘ、ちょっと見ててよ」

これってバッジだったんだ……その効果に興味を持つ以前に、リュウはそちらにツツコミを入れた。

キトラは手にしつかりとバッジを握ると、怪我をしたポケモンにそれを翳した。するとどうだろう。突然バッジが白く輝き、それに続くような形で今度はポケモン自身が輝きだし、あっという間もなく、ポケモンは白い光の粒子となって、跡形もなく消え失せてしまった。

「え………ええええっ！」

「うわ！大声出さないでよ！」

「目の前でポケモンが消えたら普通驚くだろ！何なの今の、消失マジック？」

「……まあ、初めて見たらそりゃ驚くだろうね。このバッジはね、『救助隊』の証なんだ。さっきみたいに、翳したポケモンを地上まで送り届けることができるんだよ」

どういう構造してんだとツツコむ前に、リュウは不可解な言葉を耳にしたような気がした。「救助隊」——災害発生現場に行つて人々を助ける、あの救助隊？

「……あのさ、『救助隊』って……もしかして…」

うすうす嫌な予感を感じながら、恐る恐るキトラに聞いてみた。
すると案の定、キトラは得意げに胸をそらして、

「こう見えてもボク、立派な救助隊員なんだ。サジェッタとコンビ
を組んで活動してるんだよ」

……こんな答えを返してきた。

予感見事に的中。不躰なほどリュウはドン引きしてしまった。見た目はともかくとして、口調から判断してもこの子、まだ大人の階段上り切ってなさそうだし……

「何なのその顔、疑ってる？」

「いや、だってさ……救助隊って普通子供がなれるようなものじゃないだろ？訓練とかその辺は……」

「それでもそこそ鍛えてはいるんだよ。それに救助隊に年齢は関係ないさ。だって大切なのは、『困っているヒトを助けたいと思う気持ち』だもん！」

……御尤も。だがそれでも、何か心がモヤモヤして仕方が無かった。その気持ちだけで救助隊になってもいいだなんて、どんだけこの世の中単純なんだ？

その後、キトラは残った人々を地上へ送り返した。だが、全員救助できて、キトラの心には焦りが残っていた。今助けたヒトびとの中に、ルースの息子——トーチがいなかったからだ。

「キトラ、どうしたの？」

焦りが顔に出てしまったのだろう。リュウが目聡くキトラの表情

の変化に気付き、心配そうに聞いてきた。

「あ、ううん！なんでもないよ。それより、早く君も地上に送らないとね」

「それはいいけど……キトラはどうするんだい？」

「ボクはここに残るよ。まだ助けてない子がいるから……」

首を振ってそう答えると、キトラは先程のバツジをリュウに翳そうとした。その時、

「うわああああん！助けてええええ！」

子供特有の幼く甲高い声。即座にキトラはバツジを道具箱にしまい、声のした方向へ駆けだした。成り行きということで、リュウもなんとなくついていく。左右を高い崖に挟まれた暗い道を駆け抜け、そろそろスタミナ切れになるところで、突然キトラが立ち止まった。

「うわっ、急に止まるなよ！」

リュウがつんのめって転びそうになりながら怒鳴る。キトラは何も答えなかった。ただずっと、四肢に構えて両頬から火花を出しながら前を睨んでいる。どうしたんだよ……と言おうとして、その言葉丸飲みしてしまった。

気味悪いほどにテンポ良く、重い足音が聞こえてくる。少なくとも先程の悲鳴の主ではないということだけは、流石のリュウでも分かっていった。やがて、闇でしかなかった奥の空間からヒト影が姿を現した。四方八方に伸びた葉をさわさわと鳴らし、その付け根には六つの丸い物体が取り付いてある。そしてずんぐりと太った胴体。今までリュウが散々火を吹いて倒してきたタマタマの進化形、ナツ

シーである。

「……リュウ、戦える？」

「はい？」

「今まで倒してきたポケモンもそうだったんだけど、あのナッシー、地割れに驚いて我を忘れているんだよ。あのまま放っておいたら、絶対ボク達を襲ってくる。なんとか大人しくさせないと………うわっ！」

次の瞬間、キトラの身体は小さなアーチを描いて地面に激突した。彼が説明している最中、突然リュウがタックルで突き飛ばしたのだ。僅かな間において、ナッシーが繰り出した“たまなげ”が、さっきまでキトラが立っていた場所にめり込む。

「た、助けてくれたの？」

「ごめんね、ちょっと乱暴だったかな」

小さく火を吹きながら、調子確かめるリュウ。大丈夫、まだ使えそうだ。

「さあ、行くよ」

「行くって……一緒に戦ってくれるの？」

「我を忘れてるだか何だか知らないけど、あの椰子の木みたいなヤツを倒さなきゃ先に進めないんだろ？とりあえず協力するから、さっさと片付けよう！」

こうなったらもう自棄だ———という思いを一旦封印し、リュウは大きく息を吸って、巨大な火の玉をナッシーに向けて繰り出した。

第二話 地割れの底に潜むもの（後書き）

「小さな森」にまさかのボスキャラ。
この展開が一番好きですから（何

第三話 激戦と救助 そして（前書き）

「激戦」と書いたもののよく見たら戦闘シーンが物語の半分もない件について。

……あれ？こんなはずでは……………（汗）

第三話 激戦と救助 そして

リュウが放った火球は、確実にナッシーの腹部に直撃したはずなのに、ナッシーは苦しむどころか、何事もなかったかのように“たまなげ”を連発してきた。ナッシーが頭を振るたびに、頭に取り付けてある顔のついた六個の玉の一つが飛び出し、壁にめり込むか地面を転がっていく。キトラが宙返りで玉をかわし、空中から“でんきショック”を放ったり、目にもとまらぬ速さで相手に体当たりをする“でんこうせっか”を繰り返したりして、少しずつではあるがナッシーにダメージを与えていく。だが、依然としてナッシーは疲労の色も見せないまま玉を飛ばし続けている。

「……随分としぶといね、あの椰子の木」

「ダメージは確実に与えているはずなんだよ。でも我を忘れているせいで、痛みとかそういうのを全く感じなくなっちゃったんだ」

「うへえ……羨ましいというか恐ろしいというか……」

弾む息の中、リュウが独り言のように呟く。火球を連発する際に無理な呼吸をし過ぎたせいで、息を吸ったり吐いたりする度に肺に重い痛みを感じる。キトラも未だに両頬から電気を出していても、その量は戦う前よりもずっと少なくなっていた。

二人の様子を見計らって——我を忘れているのにそういうことができるのかわからないが——いよいよナッシーは本格的な攻撃を始めた。相変わらず放つ玉は一発ずつだけれど、地面に激突した瞬間、大爆発を起こしたのだ。

「うわわわ！何だよあれ！」

危ういところで爆風から逃れたリュウが驚愕している。これは“

タマゴばくだん”。命中精度は“たまなげ”に劣るものの、何かに当たった時に起こす爆発で広範囲の敵にダメージを与えられるようになったのだ。今となっては玉一発避けるのに精一杯なのに、爆発後の煙で一気に視界が悪くなり、次に玉がどこに来るのか全く分からない状態になってしまった。

一転して防戦一方となってしまったリュウ達。先程の猛攻で疲れ果ててしまい、避けるだけでも酷い眩暈を感じた。

「うわ！」

玉は避けられたものの、巻き起こる爆風にあおられてリュウは吹き飛ばされてしまった。背中から地面に落ち、その衝撃がリュウの眩暈を少しだけ治す。両足を振り勢いをつけて立ち上がると、煙の間から、ナツシーがさらにもう一発放とうとするのが見えた。

「…こうなったら……」

なるべく煙を吸い込まないように、リュウは大きく息を吸い込む。ナツシーが“タマゴばくだん”を放つよりもワテンポ早く、最大級の火球を繰り出した。

火球と“タマゴばくだん”は、ナツシーの一メートル手前でまともにぶつかり、今度はナツシーが爆風の被害者となった。我を忘れていても、こればかりは効いたのだろう。悲鳴を上げてよろめくナツシーに、キトラが最後の“でんこうせっか”をお見舞いした。

痛みも疲れも忘れ、わけもなく暴れていたナツシーも、重い音を立てて仰向けに倒れた。念のためキトラが近づき、完全に気絶していることを確認すると、素早くリュウのもとへ走っていった。

「リュウ、大丈夫？」

「うん。たいしたことないよ」

戦っている間に酷くなっていた眩暈は、いつの間にかすっかり治っていた。

「それにしても……爆風を逆に利用してダメージを与えるなんて、バトルの知識がないのによく思いついたね」

「……あ、それはどうも」

一応褒め言葉として受けておいた。邪魔者もいなくなり、改めてトーチを探そうとすると、今度は頭上から悲鳴が聞こえた。

「降りられないよおおー！誰か助けてえええ！」

あの時と同じ悲鳴。すぐさま見上げると、地上から約十メートルあたりの壁に、緑色の何かが張り付いていた。目を凝らしてよく見ようとした途端、

「ぎよえええええ！い、い、芋虫いいいいい！」

今度はリュウの絶叫が木霊した。それに驚いたのか、今まで壁に張り付いていた緑色の物体が、いとも簡単に壁から離れてしまった。重力に従って、悲鳴を上げながら落ちていく。その落下地点は――
――ちょうど、リュウの真上。

「あ、リュウ。キャタピー落ちてくるから受け止めて」
「は、え？」

受け止めてって、腕無いヒトがどうやって芋虫をキャッチすればいいんですか？

腕の代わりに首回りに生えている羽毛をパタパタと動かすが、も

ちろんそんなことで受け止めることなんかできやしない。

「へぶっ！」

——結局、顔面キャッチするしかなかった。

（リュウより一回りだけ）小さいくせに案外頑丈で、リュウの額には僅かだが瘤ができた。

「リュウ、ナイスキャッチ！」

「こんなので褒められても全然嬉しくない……」

リュウの顔面クッション（？）のおかげで、どうやらキャタピーは怪我もなく無事のようなだ。まだガタガタと怯えていたが、キトラの説明で何とか落ち着き、トーチという名前も教えてくれた。

「やっぱり、君がトーチ君なんだね？」

「え……ぼくのこと、知ってるんですか？」

「君のお母さんが教えてくれたんだ。ずっとトーチ君のことを心配してたんだよ（発狂して糸吐くほどに……）」

「うう……ホントに怖かったです……」

涙混じりに、トーチは自分が地割れに巻き込まれた後のことを話してくれた。地面に激突する前に、母親譲りの本能からか見境なく糸を巻き散らかしたおかげで、壁にその糸が張り付き大怪我せずに済んだようなのだ。だが幼さ故に壁をよじ登ることもできないし、下には例のナツシーが我が物顔で歩いていた為、そのまま壁に張り付いていたのだという。

俯きがちに話すトーチの背中を、キトラが優しく撫でる。リュウはというと、トーチをキャッチした時の衝撃がまだ収まらないのか、しばらく自分の意識を宙に泳がしていた。

「…あのアチャモさんも、ぼくのことを助けてくれたんですね？」
「すごいんだよ、あのお兄ちゃん。落ちてくる君を顔面でキャッチしたからね」

「何でそこだけ強調して教えるんだよ……」

ようやく意識を取り戻したリュウが、ギロリと鋭くキトラを睨む。
キトラとトーチは短く笑った。

「それじゃあ、そろそろ地上に戻ろうか。ボクの周りに集まって」

リュウとトーチがそばに来たことを確認すると、キトラは道具箱からバッジを取り出し、それを天高く掲げた。

一瞬にして視界が白一色になり、キトラとトーチの姿さえも見えなくなった。足が地から離れ、徐々に上へ昇っていくような感覚がしたのを最後に、リュウの意識はブツリと途切れた。

「ママっっ!」

地上に着くや否や、トーチは真っ先に母親のルースのもとへ駆けで行った。――いや、「這っていった」と表記するのが正しいのだろうか。とにかく、ルースも我が子の姿を確認すると、ものすごいスピードで飛んでいきトーチを固く抱きしめた。

「ああ！トーチ、トーチ！大丈夫なの？怪我はない？」

「うん、平気。あそこのお兄さん達のおかげだよ!」

ルースはリュウ達を見、一先ずトーチを地面に下ろして彼らの所へ向かっていった。

「息子を助けていただいて……本当に、何とお礼を言えば……」
「いやいや、お礼なんて……それに、今回はボクだけじゃトーチ君を助けられませんでしたから。ねっ、リュウ？」
「…え？う、うん……そうだね……」

この上なく引きつった顔で笑うリュウ。原因はもちろん、ルースだ。キャタピーのお母さんというわけだから蝶であることは予想できていたのだが……身長約一メートルの蝶。何も知らない人間が見たらまず驚く。

「あ、あのっ！」

急に、トーチが前に進み出た。

「な、何？」

「その……お兄さん達の、名前を教えてください。すっごくカッコ良かったから！」

「こ、こら！トーチ！」

慌ててルースが諫めるが、キトラがやんわりと止めた。

「いいですよ。ボクはキトラ。そして、こっちが……」

「……リュウです」

キトラに言われる前に、リュウは自ら名乗った。さっきからトーチがこれ以上ないほど目をキラキラさせてこっちを見ている……。恥ずかしいような、怖いような。

「本当にありがとうございました！リュウさん、キトラさん！」

ルースとトーチの礼に笑顔で答え、自分達の住処へと帰る母子を見送っていると、

「今日は大変だったな」

ほぼ音もなく、サジェッタが舞い降りてきた。その足には、色とりどりの木の实が入った籠が握られている。

「サジェッタ、どうしたの？その木の实」

「依頼の報酬だ。ルースは果樹園を営んでいるからな。報酬はもちろん木の实だ」

籠をキトラに渡すと、徐にサジェッタはリュウの顔を見た。睨んでいるわけではないようだけれど、意味もなく傍観しているわけでもないようにも見える。

「な、何だよ」

漆黒に染まった瞳すらピクリとも動かさないの、流石のリュウもたじろいだ。そのまま数分間、気まずいようなどうでもいいような時間が流れていく。敢えて少し離れた場所で見えていたキトラも、少し緊張を感じた。

やがて、サジェッタは目を閉じ、僅かに首を横に振った。

「一応、礼を言わせてもらう」

「え？」

「キトラを助けてくれたんだろう？」

……そのことを聞くだけでこんなに気まずい時間を作ったのかこ

の鳥は……なんて言ってしまったら生き埋めにされるので、とりあえず一つ頷くと、サジェッタが口の端にそっと笑みを添えた。

「あれ、珍しいね。サジェッタが笑うなんて」

「礼を言うときも無愛想だったら失礼だろうが」

サジェッタはキトラを睨むと、またリュウに視線を戻した。今度は無駄な時間を開けず、翼で「ついてこい」のジェスチャーをした。

「いい所に連れてってあげるってさ。行こうよ！」

先に飛び立ったサジェッタに続いて、キトラも走り出す。リュウだけがまだよく分からない展開についていけず、またなんとなくついていくことにした。これで三回目である。

サジェッタが再び地面に足をつけた場所は、レンガ造りの建物の前だった。形は雪で作った鎌倉を連想させるが、ちゃんとドアも付いており、家の周りを囲むように薪用であろう木の枝が並べられている。中に暖炉でもあるのだろうか、てっぺんの煙突からは煙がもくもくと出ていた。

中に入ると、やはり最初に目につくのは暖炉だった。その近くには藁を寄せ集めて作ったベッド。床には丸いカーペットも敷いてあり、こぢんまりとしたちゃぶ台の上にはリングが何個か入ったお盆がある。

「どう、立派でしょ？これがボク等の救助隊『エルドラックブレイン』の救助基地なんだよ！」

地下の時のように、キトラが得意げに胸をそらして教えてくれた。

救助基地——にしては、なんだか平凡な一軒家のように見えるのは気のせいかな。まあ、住むには十分すぎるほど快適そうな家だった。

「まあ、立派かどうかはいいとして、本題に入ろうか」

リュウが一通り部屋の中を見渡し終えたのを見計らって、サジェツタが口を切った。

「今のお前は記憶喪失プラス人間からポケモンになって、わけが分からないままこの世界にやってきた。なんとか人間に戻る方法を探そうと思うけれど、住む家もなければこの世界の常識その他も知らない。結局、当てもなくそこら辺を彷徨うしかない。大方、そんなところじゃないか？」

凶星——というか、恐らくこの後考えようとしていたことを全て言われた。ご丁寧に、これからリュウがどうなるかも当てて。

「……恥ずかしながら、そんな感じですよ」

「やっぱりな。そこで、だ。正直俺は気が進まないが……お前、俺達の救助隊に入らないか？」

突拍子もないことに、リュウは声も出せず固まってしまった。よりによってその提案がサジェツタからというのも十分驚きなのに、救助隊に入らないかとは……一瞬、聞き間違いかと思うほどだった。

「もちろん、タダでなんてケチなことはいわないよ。今ならこの基地が君の家になるサービス付き！」

キトラがどこぞのセールスマン風な口調で言った。今この提案に「はい」と答えれば、この基地がリュウの家となり衣食住には困ら

ない。ただ、提案がどうしても「はい」と言いづらいものだった。救助隊って……さっきのように災害現場まで行ってヒトを助けるということを毎日やるなんて、下手したら人間に戻る前に命を落とすかもしれないのに。

「さあどうする？『入る』か『入らない』かの二択だ。五秒以内に答えろ」

こうなったらもう自棄だ——ナツシー戦の前に封印しておいた思いが、今の状況にマッチしていた。

「分かりました。やります」

「声が小さい。お前男だろ？」

「分かりましたやりますこれからよろしくお願いします！」

苛立ちを詰めに詰め込んだリュウの叫びが、基地を飛び越え森や山に響き渡り、茜色の空を飛んでいた鳥ポケモン達の度肝を抜いた。

リュウ本人としては、ほぼ投げやりで決めたこの選択。

だがその選択が、後に世界の運命を大きく変える引き金になるなど、誰一人知るはずがなかった。

第三話 激戦と救助 そして（後書き）

救助隊「エルドラクIIブレイブ」入隊。

ちなみにゲーム上の表記は「Eブレイブ」。

ちゃんと五文字です。すっごくどうでもいいですね！ハハハ……

第四話 戸惑いばかりのポケモン生活（前書き）

タイトルまんまですな。今に始まったことではありませんが。

第四話 戸惑いばかりのポケモン生活

生き物のほとんどは、その日に酷使した体力を回復するため、また明日の鋭気を養うために「睡眠」という行動をとる。それは、身体がポケモンになっても同じことである。多分。

でも、なんというか……どんな生き物であれ、眠るための環境も睡眠には不可欠だと思う。スケールの大きすぎる例えだとは思いますが、活火山の火口で寝るよりは、森の中で眠った方が断然安眠できる。いくらこの世界の文明が人間世界ほど発達していないとはいえ、

「流石に藁敷き布団はないと思うんだよなあ………」

暖炉の中で薪がパチパチとなる音を聞きながら、リュウは大きな欠伸をした。藁敷き布団は寝心地が悪くて、疲れていてもまともに寝ることなんかできやしない。欠伸したついでに、思い切り息を吐いてみる。暖炉の火より小さいが、やはり息に混じって炎が迸った。――こりゃ寝てる時に下手したら、寝息が布団に引火したりして。

苦笑いしながら心の中で呟いた。

「リュウ！起きてるー？」

ドアをたたく音に混じって、こちらの気分とはまるで正反対の元気な声が聞こえてきた。確か、例の黄色いネズミ――じゃなかった、ピカチュウのキトラだっけ。

「返事くらいする！礼儀でしょ？」

「うわわ！いきなりドア開けるなよ！」

引き戸をガラガラと開けて、キトラが飛び込んできた。少し遅れて、寝起きで一層不機嫌な顔をしたサジェッタが入ってくる。

「……って、何勝手にヒトの家に入ってきてんのさ？」

「ここはボク等の救助基地だよ。いつから君の家になったわけ？」

「『救助隊に入ればもれなくこの基地プレゼント！』っていう言葉を昨日聞いたはずなんだけど」

「あくまで貸しただけ。大家は俺とキトラだ」

なんとという理不尽。貸すならちゃんと「貸す」って言えばよ。リュウは眉間に力を入れて皺を寄せた。

「それにしても、戸締りもしないで寝ちゃって……泥棒が入ってきたらどうするの？」

「やっぱこの世界にも『泥棒』ってものがあるんだ。人間の世界よか平和だと思ってたよ」

「昨日教えたこともう忘れちゃったの？ここ最近は自然災害のせいで街の皆が不安な日々を過ごしてるから、犯罪とかも後を絶たないんだ」

リュウの救助隊入隊が決まった時、キトラがこの世界のことについてさらに教えてくれたのだ。おかげで寝るのが遅くなってしまったけれど。

日常生活が不安だらけだから、犯罪が頻繁に起こる……嫌な悪循環だけど、人間世界だって一昔前は、不景気やら何やらでそれに乗じた犯罪が多発して物騒な世の中になったりもした。その点では、人間もポケモンも同じなのだろう。

——こう考えてから思ったのだが、リュウは人間世界の常識ならば、ある程度は記憶に残っているようなのだ。ただ思い出せない

のが、自分に関する事柄だけ。広い世界のことは覚えていて、狭い自分のことが思い出せないなんて、ちょっと違和感を覚える。

「まあとにかく、お前の記憶については一応こっちも協力するが、俺達の救助隊に入った以上、きちんと仕事もやってもらうからな」

まだ眠いのか、不機嫌な顔のままサジェッタが言った。彼こそが、救助隊「エルドラクⅡブレイブ」のリーダーなのだという。

「エルドラクⅡブレイブ」は、結成してまだ一週間の駆け出し救助隊だ。最近入隊したリュウを除けば、隊員はリーダーのサジェッタと、副リーダーのキトラだけ。彼らは双方、自然災害でそれぞれの両親を亡くした、いわゆる孤児なのである。だがポケモンは、生まれてから一か月くらいすれば、自然と一人でも生きていける程度の知恵は身についてくる。幼馴染であり同じ境遇でもある者同士、互いに助け合って生きてきた二人は、自分達が受けた不幸が二度と起こることのないように、自然災害の被害に遭ったヒトを助ける救助隊を立ち上げたのだった。

だが―――立ち上げたからといって、すぐに救助依頼が来るとは限らない。キトラ曰く、森でトーチを助けたのが初めての依頼だったという。しかも報酬は木の実数個。こんなので食いつなげていけるのか?……と、口に出してしまいたいそうなほどリュウは思ったものである。

「エルドラクⅡブレイブ」の簡単な説明はこのくらいにして、リュウ達に視点を戻そう。現在リュウ達は、今日受ける依頼を探すために「サルベージタウン」を経由して「ペリッパ連絡所」へ向かっている。「サルベージタウン」というのは、この「アナザー」の中でも数少ない「街」の一つである。一般人(…あ、一般ポケモンか)が住む住宅街や、救助隊が冒険の準備をするための店や倉庫、

はたまた銀行まであった。経営者はもちろん、個性豊かなポケモン達。これから何度もお世話になるため、慣れなければならぬというのは承知しているけれど、リュウにとってやはりポケモンを見るのは初めてなせいか、数分街中を歩いただけで眩暈を覚えた。

「……リュウ、大丈夫？ 顔紫色だよ？」

「……………」

「話しかけない方がいいんじゃないか？」

「そ、そうだね……」

なるべく駆け足で街を通り抜け、やっと目的地に着いた。「ペリッパ―連絡所」——全国から依頼が集められてくる、いわば救助隊の出発点。救助隊は朝早くここへきて、入り口近くの掲示板に張られた依頼をチェックするのが日課なのだ。ちなみに、「救助隊バツジ」を使って地上に送られた時、特に細かな設定をしていなければ到達点はここになるのである。

「さてと、今日はどんな依頼にしようかなあ……」

キトラがサジュッタの頭の上に乗る、掲示板に張られた何枚もの依頼状を眺めている。高さはそれほどものではないのだが、身長四十センチのリュウやキトラにとっては、地上から三階建てのビルの屋上を眺めているようなものである。それでもリュウは、精一杯高く飛び跳ねながら、キトラと同じように依頼を探そうとしていた。

「…あの、無理しなくてもいいんだよ？」

「だってっ、オレだってっ、見たいっ、んだよっ！」

顔を紫から赤に変えて、必死に飛び跳ねるリュウ。子供なのだ

が、大人げない。

「大体っ、サジェッタっ、オレもっ、乗せてっ、くれたってっ、いいじゃっ、ないかっ！」

「悪い、途切れ途切れで聞こえなかったからアンコール」

リュウには見向きもせず、サジェッタはボーッと掲示板を眺めていた。流石に堪忍袋の緒が切れ、リュウは何か言おうとしたのだが、口を開いた瞬間、サジェッタの踵落としがリュウの脳天に直撃した。

「…次それ言ったら地面に埋めるぞ」

「まだ何も言っていないじゃないか……………」

俯せになって呻いていると、視界に何か白いものが飛び込んできた。おおよそ文字には見えない文字が、規則正しく列を作って書かれている。多分、掲示板に張ってあった依頼状の一枚が？がれてしまったのだろう。当然、元人間のリュウに読めるわけがない。

「ん、リュウ、どうしたの？」

「依頼が一枚落ちてきたんだ。…………読めないから、読んでくれる？」

「今日の夜は読み書き勉強会になりそうだな」

わざとかどうかは分からないが、サジェッタがものすごく澄ました顔で呟いた。絶対イヤミ成分は若干含んでいるのだろうけれど、何か言ったら今度は生き埋めにされる。リュウはおとなしく依頼の内容に耳を傾けることにした。

「ええと…………これは救助の依頼だね。『遊んでいて地割れに巻き込まれてしまいました。どうか助けてください』。場所は……………昨日の森だ」

「あの森、まだ地割れが続いてたのか？」

「そうじゃない。遊んでいて誤って転落してしまったんだ。昨日の地割れ以来、あの森は立ち入り禁止区域になっていたはずだからな」

子供特有の好奇心で危ない所に入った挙句、酷い目に遭ったというのか。

昨日行った場所だし近いので、全会一致でこの依頼に決めた。早速、準備をしに街へ戻ろうとすると、

「もしもーし。アナタ達ひよつとして、救助隊ではありませんかー？」

間の抜けた声の主は、連絡所と同じような外見のポケモン、ペリッパ。肩から黒い鞆を下けている、人間世界でいう郵便屋さんみたいな恰好をしていた。大きな鳥なら、サジェッタを見たおかげで慣れているので、（少なくともドン引きはしたが）リュウはそれほど驚かなかった。

「そうですけど……何か？」

「いやー、ついさっき救助隊連盟から召集令が出されましたねー、『サルベージタウン』周辺の救助隊リーダーは至急、連盟本部へ来るようにとー」

「召集令？何なんだろう？」

「どうせまた災害のことだろう。ちょっと行ってくるから、お前達はさっさと救助を済ましておいてくれよ」

「エルドラクIIブレイブ」リーダーのサジェッタは、大きな翼を一振りし、山の方角へと飛んで行った。それを見送った後、リュウ達は「サルベージタウン」で一通りの準備を済ませ、初めての救助となった舞台――「小さな森」へ、再び足を運んだ。

救助は昨日よりもずっと簡単だった。ナッシーなどの強敵は出てこなかったし、それ以前に、地底に到着して少し行った先に依頼主を発見したので、日が沈む前に地上に戻ることができたのだ。

もう二度とあの森では遊ばないと約束した上で、リュウ達は依頼主を家まで送り届けてやった。疲れて寝てしまった依頼主を送り届けるのがなぜリュウだったのかは、未だに理解できなかったことなのだが。

「あ、サジェッタだ。おーい！」

依頼主の家から救助基地に戻る頃には、日はもう沈みかけていた。キトラが手を振ると、救助基地の前に立っていたサジェッタも、小さく手（翼？）を振り返す。

「今日は随分と早かったじゃないか」

「まあね。ところでサジェッタ、召集って結局何だったの？」

「ああ、あれか？別に大したことじゃないんだ」

なんでも、最近自然災害が「サルベージタウン」周辺に集中していることが、調査で明らかになったらしい。そこで、少しでも被害を抑えられるように、全国各地の街から一組ずつ、救助隊が派遣されることになったのだという。

「それじゃあ、『サルベージタウン』は今まで以上に賑やかになるね」

「オレとしてはものすごく複雑な気分なんだけど……」

「いい加減慣れる。俺からはそれくらいしか言えない」

「はいはい………」

リュウは苦い顔をしながら救助基地——つまり自分の家に入ろうとしたのだが、何故かキトラとサジェッタもさりげなくついてきていることに気が付いた。

「あれ、まだ何かあるの？」

「何かって……………今朝サジェッタが言ってたじゃない」

「へ？」

「『今日の夜は読み書き勉強会になりそうだな』…………俺、確かそう言っただけなんだけど」

「えーっ、じゃあまた寝るのが遅くなるじゃないか……………」

「それはボク等も同じだよ。すぐに覚えられるから、早めにやって早めに切り上げよう！」

「う……………」

当分まともに寝られる日は来ないだろうなあ…………と、その夜、ポケモン文字の五十音表を壁に張り付けながら、リュウは炎混じりの溜息をついた。

第四話 戸惑いばかりのポケモン生活（後書き）

この話では言及しませんでした、
救助隊「エルドラクⅡブレイブ」、八日目の正直も失敗w
ポストに来る依頼をこなせるのはもう少し先になりそうです。

第五話 誘拐事件（前書き）

「『救助隊を小説化？今さら？古くない？』そんなことあ言わせねえ！」

……と言えるようになるまで紀はあと何年費やすんだろうと思う今日この頃。

第五話 誘拐事件

キトラとサジェツタからポケモン世界の文字をあらかた叩き込まれ、今日も寝るのが遅くなってしまった。できるだけ多く睡眠時間を稼ごうと、早めに藁葺き布団に寝っ転がった。だから現在、リュウは自分の家にいるはずなのだ。——それなのに、

今リュウは、だだっ広い草原の中を一人で歩いていた。地面に目を向ければ青々とした草や小さな白い花、上に視点を変えれば雲一つない青い空。遙か地平線の先には、幾つもの山々が連なっている。これは夢なのか——？ぼんやりと歩きながら、リュウは頭の隅でこの疑問を持ち続けていた。眠ったと思ったら、いきなりこの地に立っていた。だから夢であるはずなのだ。だけど、地面の感触、吹く風の心地よさも、限りなく現実に近い。歩けば歩くほど、夢と現実の区別がだんだんとつかなくなってきたような気がした。

「……………?」

全身で穏やかな風を受けていると、その風の中に音楽が混じっていることに気が付いた。ピアノではない。同じ弦楽器———そう、ハープだ。今吹いている風と同じくらい柔らかなハープの音が、どこからともなく聞こえてくる。

ふと顔を上げてみる。すると今まで草原と山と青空しかなかった景色に、大きな一本の木が現れたのだ。そしてその根元に、誰かが座っている。日陰の中に隠れてよく見えなかったので、リュウはその正体を確かめようと走り出したのだが、

「……………うわ!」

一歩足を踏み出した瞬間、地面が大きく揺れ始めた。しかも、信

じられないほど大きい。だが、今のリュウの目の前には、それよりも信じられない光景が広がっていた。

空、山、草原——今まで見ていた美しい景色に突如、稲妻のような大きなヒビが入ったのだ。まるで最初から絵に書かれていたかの如く、ガラスが割れるような音を立てて、バラバラと崩れていく

一際大きな音が、リュウを眠りの世界から現実に取り戻した。一気に開けた視界の隅で、数個のリングがコロコロと転がっていく。先程の大きな音は、リングが入ったお盆がひっくり返った音だったのだ。夢の中だけだと思っていた地震が、まさか現実でも起こっていたなんて、正夢もいいところである。

「リュウ、リュウー！」

ドアを激しく叩く音と共に、キトラが呼ぶ声が聞こえてくる。余程慌てているのか、ドアが反り返るほど強く叩いていた。

「あ、リュウ！」

「あんまり強くドア叩くなよ」

「だってすごい地震だったんだもん。基地は……どうやら大丈夫みたいだね」

「殺風景な部屋が幸いしたってところかな」

「エルドラックIIブレイブ」の基地はひっくり返ったリングとお盆あとちゃぶ台の上で倒れている三つのコップを除けば、ほぼ全てがいつもの状態で残されていた。何よりこの基地は、所有している救助隊が貧乏であるが故にインテリアどころか生活に必要な家具すら

ないので、散らかる要素など何もないのである。

「よかった。サジェッタのところなんか凄かったんだから。震源地に近かっただけあって、被害も酷かったみたいだよ」

「そういえばいいいな。我等が救助隊『エルドラクⅡブレイブ』のリーダーが」

「地震で家が壊れちゃって、その修理をするから遅れるってさ。いつも以上にすごくイライラしてたなあ……」

当然だ。ただでさえサジェッタは寝起き癖が悪い。その上自宅崩壊ときたら……彼でなくてもイライラするだろう。

「さて、リーダーがいなくても仕事くらいはやらなくちゃね。リュウ、ポストの中は見た？」

「起きたばかりなんだから見てるわけないだろう？」

リュウは外に出ると、ポストまで走って行き嘴でその蓋を開けた。本来依頼状は「ペリッパ―連絡所」で手に入れるのが普通だが、救助隊が有名になってくるとその基地のポストにも依頼が来るのだ。さて、そのポストの中は――

「清々しいほど何もないな」

「うう………そっかぁ………」

期待していたのか、キトラは本当に残念そうに項垂れた。だが、いくらがっかりしてもポストに依頼状が出てくるわけがない。あきらめて昨日のように「ペリッパ―連絡所」へ行こうとすると、

「あれー、アナタ達は昨日の救助隊ではないですかー」

つい最近聞いたような間の抜けた声。それは東西南北どこからでも聞こえてくるのではなく、頭上から聞こえてきたのであった。

「あ、昨日のペリッパー……」

「郵便屋のカテージと申しますー。なるほどここがアナタ達の救助基地だったんですねー」

カテージという名のペリッパーはリュウ達の頭上で旋回すると、ポストの上に降り立った。降り立った瞬間、ミシッ、という変な音が聞こえてきたのは気のせいということにしておこう。

「実は昨日、トーチちゃんからアナタ達のことを聞きましたねー、なんでもアナタ達、デキのいい救助隊なんだとかー」

「で、デキのいいって……（子供が言う感想じゃないよな、それ……）」

「それで街ではちょっとした噂になりましたねー、今日はアナタ達宛の依頼状を持ってきたわけですー」

「！」

カテージのセリフ「持ってきた」の「た」が言い終わった瞬間、キトラは“でんこうせっか”以上のスピードでカテージの手から依頼をぶんどっていた。

「よっぽど依頼に飢えていたんでしょうかねー」

「いや、間違っちゃいないと思いますけど……」

リュウとカテージが呆然とした顔で見ている中、キトラは無言で依頼状の封を切っていた。そして中身を取り出し、頼んでもいないのに内容を読み始めた。

「えっと、……救助隊『エルドラックIIブレイブ』の皆さんへ。あなた方のことはトーチ君から聞きました。あなた達のお力を見込んでお願いがあります。今朝方の地震の後、突然私達の住処にエアームドが押し入り、私達の息子、イオを『ハガネ山』まで連れ去ってしまいましたのです。『ハガネ山』は住処にしているポケモンも狂暴なので、私達では太刀打ちできません。何卒よろしく願います……」

「要するに、誘拐事件ってわけですねー」

内容はともかくとして、リュウは妙なことに気が付いた。

「あのさキトラ、その依頼、依頼主は誰なの？」

「えーっとね……あれ？書かれてないや」

文面にはおろか、封筒にすら宛名が書かれていない。リュウとキトラが顔を見合わせた、その時。

「あの一、もし？」

どこからか声が聞こえてきた。今回は東西南北でも、頭上でもない場所から。

「キトラ、なんか言った？」

「言っていないよ。カテージさんじゃない？」

「ワタシも何も言ってもせんよー」

リュウは辺りを見回した。ここにいる三人以外、庭にも路上にも誰もいない。空を飛ぶ鳥ポケモンすらいなかった。すると、

「……………あ、もしかして姿が見えない？これはどうも失礼しました

！」

声の主が姿を現したのは、なんと地面からだった。近くにいたりユウは声にならない悲鳴を上げ、自分から三メートルくらい飛び退く。

「あ、あ、あの、あなたは……………」

腰を抜かす程度に驚いたキトラが恐る恐る尋ねる。声の主——モグラに似た容姿のダグトリオは、三つの顔だけを回してキトラの方を向いた。

「どうも、町はずれに住むアイオンと申します。今朝の誘拐があつて慌てて依頼状を書いたものですから、宛名を書くのを忘れてまして……………とにかくっ！内容の方はそちらの依頼状にしっかりと書いておきました！どうかイオを助けてください！ではっ！」

早口で一方的に喋った挙句、アイオンは再び地面に潜った。結局彼の長い話で重要だったのは、依頼主の名が「アイオン」ということだけ。とりあえず、キトラは気を取り直して依頼状を道具箱に入れると、二重の原因で気絶しているリュウを叩き起こした。

「いてっ！ちよ、ちよっと！起こし方にも程が……………」

「カテージさん、今朝早くからありがとうございました」

「なんの、お安いご用ですよー」

カテージに軽く会釈して、キトラは準備のために「サルベージタウン」へ向かった。無視されたリュウは怪訝そうにしながらも、キトラの後についていく。カテージは一先ず職場に戻ろうとしたのだが、思いついたように顎を一撫ですると、北東にある森へと飛んで

行った。

荒れ地にそびえる「ハガネ山」は、そこに辿り着くだけでも相当な労力を要した。車はもちろん自転車すらないので、移動手段は自分の足で歩くしかない。休み休み行きながら入り口に着く頃には、太陽がもう真上に到達していた。

「ハガネ山」は昔——人間とポケモンが共存していた頃、いい鉱石が採れることで有名な鉱山だったのだという。人間がいなくなった現在、鉄の需要が次第に無くなっていったので鉱山としての機能は失われたが、鉱石を主食としているポケモンにとっては定住するのに絶好の場所となった。災害が多発しているこのご時世、ここではそんなに目立った災害は起きていないものの、不安が募りに募ったポケモン達が訪れるヒトに危害を加えることは「小さな森」と変わらない。しかも誘拐犯がこの山頂にいるとなると、楽してこなせる救助ではないということ、リュウもキトラも十分承知していた。

「こうしてみると、ホントに大きな山だね」

「身体が小さいと尚更そう見えるよ」

昼食がてらに持参したリングを齧りながら、リュウ達はしばし「ハガネ山」の荘厳な佇まいに見入っていた。道具箱の半分は食料の「リング」で占められている。この「ハガネ山」は荒れ地に立っているため、ロクな食料が手に入らないのだ。キトラが長らく「サルベージタウン」にいたのは食料を買い込むためと、町の人から「ハガネ山」に関する情報を得るためだったのである。

「ところで、キトラ」

「なあに？」

「その……依頼主の息子さんを攫ったっていう……エアームドって、どんなポケモンなんだ？」

本当にキョトンとした顔で聞いてくるのが尚更悲しい。ポケモンはキトラほどの年になれば、大多数のポケモンを目で見えるか誰かに教えてもらうかで覚えているものだ。同じ年らしきポケモンにこれから常識をいろいろ教えなくてはならないと思うと、さすがに気疲れしてくる。

………って、そう思っていることを顔に出したらもっとマズい。

「……あー、んっとね、簡単に言っちゃえば、鋼鉄でできた鳥ポケモン。サジェッタより一回り大きいポケモンなんだ」

サジェッタだけであんなにビビったってのに、まだデカイ奴がいるのかよ……リュウにとっては、できればそんな奴とは関わり合いいなりたくないところだが、今回は最低限出会って、最悪戦わなくてはならないのだ。職業柄このようなことが何度も起きる以上、早いところポケモンというものにいろいろな面で慣れないと、「救助隊をやめる」ということしかこの気持ちから解放される選択肢がないのである。

気を取り直して、いよいよ「ハガネ山」に突入するリュウ達。山と言っても山肌を登るのではなく、中から登るのだ。薄暗い洞窟の中、明かりはリュウが火で点けた松明があるので事欠かないが目立ってしまうため我を忘れたポケモン達から常々襲われることになってしまう。先程述べた鉄を主食とするココドラ、丸くなると石ころと見分けがつかなくなるイシツブテ、おおよそ山と何ら関連がないはずのくわがたポケモン、カイロスなどが所構わず襲ってくるのを、リュウは火を、キトラは電気を操ることで撃退していった。

少し急な上り坂を上りきると、比較的明るい広間に出た。天井の斜め上に大きな亀裂が入っていて、そこから日の光が入ってくるのだ。松明の火を消し、周りに誰もいないことを確かめてから、慎重に広間を横切ろうとすると、

「あーもう！今度は侵入者ザマスか？朝の地震と言い今日はもう厄日ザマス！」

“きんぞくおん”のような甲高い声が、リュウとキトラの耳を劈く。いち早く声の位置に気付いたキトラが上を睨む。間もなく天井の大きな隙間から、巨大な影が風を切って入ってきた。日光を反射して白く輝く銀の翼。アイオンの言っていた誘拐犯、エアームドである。

「アンタ達、何しに来たザマスか？ここはあたしの縄張りザマス！」
「（語尾に『ザマス』ってつけるヒト初めて見たぞ……）あ、あんたが攫ったイオってやつを助けに来たんだよ！」

見た目と口調のギャップに少々引きながらも、リュウは唾を飛ばして怒鳴り返した。一方のキトラは四肢になり、頬から電気を発してすでに戦闘態勢に入っている。興奮のあまり顔を真っ赤にしていたエアームドはふと表情を戻し、リュウとキトラを交互に見、ニヤリと笑った。

「アンタ達、そのなりだと救助隊ザマスね。勘違いしないでほしいザマス。あたしはただ昨今の災害を根本から撲滅するっていう慈善事業をやっているだけザマス」

「じ、慈善事業？」

キトラが素っ頓狂な声で返す。慈善事業って、どう考えても誘拐

とは縁遠い言葉である。

「ここ最近起こっている地震のことザマス！朝から晩までグラグラ揺れて夜も眠れないザマス！そんな折、地中に住むディグダやダグトリオが大暴れして地震を起こしているって聞いて、見せしめに一人掻っ攫って懲らしめてやろうとしているわけザマス！」

意外な誘拐理由に、リュウもキトラも声を上げるほど驚いた。

「そ、そんな！いくらなんでもそれは酷すぎるよ！それにディグダ達が暴れたくらいで地震なんて……………」

「うるさいザマス！あのガキを助けに来たっていうんなら、それ相応の実力は見せるザマス！」

キトラが必死に弁解しても、頭に血が上ったエアームドは聞く耳を持たない。エアームドは翼を一振りしてリュウ達との距離を置くと、再び翼を日光に反射させた。

第五話 誘拐事件（後書き）

出ました！スネ○m……もとい、ザマスエアームドさんです！

電車の中で救助隊やっててコイツが出てきた時、

盛大に吹いて友人を含めた周りから白い目で見られたあの日の記憶が蘇るぜ……

第六話 銀翼の鳥（前書き）

タイトル見て気付いたのですが、某海の神様も銀翼の鳥だった件について。

しかも冷静に考えてみたら、エアームドの翼ってほとんど赤じゃねーか……

はい、タイトルが思い浮かばなかっただけです（蹴

第六話 銀翼の鳥

「……さて、家の出来はこんなものかな」

リュウ達がエアームドと対峙しているちょうどその頃、サジエツタは今朝の地震で崩壊した家の修理を済ませていた。……修理と言っても、大概の鳥ポケモンの巣は木の枝を寄せ集めて作る簡素なものなので、わざわざ材料を調達しなくてもバラバラになってしまったものをまた集めて組み立てればよいだけなのだが。

サジエツタの住むこの森は、比較的高い木が多いので鳥ポケモンが多く住みつくことから、「飛翔の森」と呼ばれている。森のシンボルでもある巨木には「飛翔の森」の長老が住んでおり、幸いこの巨木は無事だったものの、他の住居は木そのものが倒れるなど深刻な被害を受けていた。一休みしたら、サジエツタも救助隊員として、怪我人を病院へ運んだり他の家の修理を手伝ったりするつもりである。

「いやー、これは大変なことになってますねー」

修理したての家で休んでいると、間の抜けた声が家の中に入ってきた。サジエツタの家の隣に立っている木の枝で、カテージが羽を休めている。つい昨日会ったばかりなので、声と顔くらいはサジエツタも覚えていた。

「アンタ、昨日のペリッパーか」

「先日はどうもー、カテージと申しますー。さっき『エルドラクⅡブレイブ』の皆さんにお会いしたんですがー、なんか一人足りないなーと思ひましてー、気ままに飛んでたらアナタを見つけたわけですよー」

「…………そこまでは聞いてない。というか質問もしていない」
「ひゃー、クールなツツコミですねー」

カテゴリーは翼を広げると、サジェッタの家の木の枝に飛び移った。

「『エルドラクⅡブレイブ』に会ったと言ったな。彼等はどうしている？」

「さっそく仕事をしに行きましたよー。ワタシ、彼らに依頼状を届けたんですー」

「そいつはご苦労様。で、どこへ？」

「『ハガネ山』だそうですねー、なんでもエアームドに連れ去られたディグダを助けに行くらしいですねー……って、あれー？」

微かな羽ばたきだけを残して、サジェッタの姿はすでにそこから消えてしまっていた。

「（……エアームド……か。もしアイツがあのお方の力をそのまま受け継いでいるなら、倒すこともそんなに難しいことじゃないが……ま、行って損することは何もないか）」

歩きでは五時間以上もかかる「ハガネ山」も、空を飛んでいけばそんなにからない。すれ違う鳥ポケモンも驚くほどのスピードで飛びながら、サジェッタは一路、「ハガネ山」を目指して翼を羽ばたかせた。

一方、ここは「ハガネ山」頂上付近の空間。あと少しで山頂到達というところで、幸か不幸か誘拐犯であるエアームド自らがリュウ達の目の前に現れたのだ。まともにこちらの話も聞いてくれず、現在やむを得ず戦っているのだが、二対一という有利な状況にもかか

わらず、リュウとキトラが押されっぱなしの状態になっていた。

というのも、相手は空を飛べるのでこちらの攻撃を縦横無尽にかわせるのに対し、リュウ達は地面を走るかジャンプするかしか避ける手段がない。しかも仮にうまく避けることができたとしても、高威力の攻撃が巻き起こす爆風に煽られて徐々にダメージが蓄積していく。そして、渾身の力で繰り出した技がいとも簡単に避けられることでたまっていくストレスと、ダメージに比例して大きくなる焦りだが、リュウとキトラの身体を内側から蝕んでいった。

「ちよこまかとウザったいザマス！これでもくらうザマス！」

向こうもイライラしているのか、さらに一オクターブほど高くなった叫びをあげるエアームドの翼から、突然無数の小さな黒い塊が飛び出してきた。重力に逆らってフワフワと浮いていると思った刹那、それらが雨のようにリュウ達に降りかかってきた。

「あいててて！何だよこれ！」

黒い塊が地面に到達して初めて、それらが何本もの鋭い棘を伸ばしている物であるということが分かった。これは“まきびし”。鋭い菱を相手の周りにバラ撒き、行動範囲を狭める技だ。

「どうするのリュウ！これじゃあ動けないよ！」

焦りを露わにして怒鳴るキトラの身体は、先程の“まきびし”が当たったのか所々血が滲んでいた。今のリュウもそんな状態なのかと思うと、背筋が寒くなる。

流石のリュウも、現在切羽詰まった状況であるということは十分に理解していた。エアームドが余裕たっぷりの表情でリュウとキトラを交互に見ているあたり、次はどちらかを大技で菱ごと吹き飛ば

すつもりだろう。避けようにも周りに散らばっている菱が行く手を遮るし、かといってジャンプして避けたら余計狙われやすくなってしまう。そうになると、残る選択肢は――

「“でんきショック”！」

リュウがその選択肢を思い浮かべる前に、キトラが素早く行動に移っていた。「避ける」ことができないのなら「手っ取り早く倒す」しかない。しかし、避ける隙も与えないつもりで放ったこの技も、エアームドの白銀に輝く翼でいとも簡単に弾かれてしまった。

「決めた！まずはアンタから倒すザマス！」

エアームドはニヤリと笑ってそう宣言すると、両翼を今までで一番強く輝かせた。あまりの眩しさに目がくらんでしまい、狙いを定められたキトラは避けることすらままならない。必死に力を入れて開けたリュウの目には、“はがねのつばさ”でキトラを叩きつけようとするエアームドの姿があった。

「キトラアアア！」

キトラの名を叫ぶと共に、リュウはダメもとで炎を吐きだした。エアームドに当てようとしても到底間に合わない。そんなことは分かっているはずなのに、こうすれば何か奇跡が起こるかもしれないという変な予感が、リュウの心の片隅で顔をのぞかせていた。

瞬間――信じられない光景が、この場にいた者達の目にスロー再生で移る。

リュウの口からは確かに炎が出たのだが、その炎は明らかに今ま

では違っていた。おおよそ自然の火の色とは思えない、鮮やかな赤——緋色の炎が、大きく開かれたリュウの口から極太の火柱となり、エアームドの飛行速度より何倍も速いスピードで迸ったのだ。エアームドもちろんその炎を見たわけなのだが、見たと思った次の瞬間には、天井を突き破るまで緋色の火柱に押し出され、やがてエアームド自身が菱ごと遙か彼方まで吹っ飛ばされる結果となった。

「うわわわわ！何ですかあれ！」

緋色の炎でできた火柱は、山頂からも確認することができた。それに驚いて声を上げたのは、エアームドに誘拐されたディグダ、名前はイオ。そして、その近くでオニスズメの群れと奮闘していたのは、

「つばめがえし」！

「エルドラックⅡブレイブ」リーダーのサジェッタだった。空を飛んだおかげでリュウ達よりも早く着いた彼はすぐにイオを見つけ、待ち伏せていたように襲いかかってきたオニスズメの大軍を片っ端から蹴散らしていたのだった。そして今、残る一名を撃退したところである。

立ち上る緋色の火柱は、無論サジェッタも目撃していた。最初は驚いたが、やがて彼の心に、長い間込み上がることのなかった懐かしさが込み上がってくるのを感じた。

「やはり……間違いなかったか」

「ん？サジェッタさん、今何か言いました？」

一連の騒ぎが終わって一安心したイオが、サジェッタの顔を覗き込む。

「……いや、なんでもない」

「そうですか。でも………ありがとうございました。危ないところを助けてくれて………」

「悪いが、礼を言うのは『サルベージタウン』に戻ってからにしてくれないか？救助というのは、無事に街へ戻って初めて成功したことになるんだからな」

「は、はい！」

「よし、まずは一旦下山するぞ。すぐ近くに俺の仲間がいるはずだからな」

サジェッタの予想通り、山を下り始めてすぐにリュウとキトラを発見した。火柱に巻き込まれたのか、溶けかけて変形した“まきびし”が辺りに散らばっている。その中で、あちこちに小さな傷を負いながらも、リュウとキトラは呆然とした顔で穴の開いた天井を仰ぎながら座り込んでいた。

「リュウ、キトラ！」

サジェッタの声で、やっと我に返ったのだろう。二人とも誰かに引っ叩かれたように同時にこちらを向いた。

「サジェッタ！」

「遅すぎだろ！どんだけ自宅修理に時間かけてんの！」

「悪かったな。詫びにお前達が捜していた奴を連れてきてやったぞ」

サジェッタは脇に退いて、リュウ達にイオの無事を確認させた。

キトラはもちろん、リュウも今回は、イオにビビらずに安堵のため息をつく。

「ところで、コイツを攫った……ええと、エアームドだったか？そいつは……」

ここで何が起こったのかは薄々理解できていたのだが、念のためにサジェッタは聞いてみることにした。しかし、

「ゴメン、なんでだか分からないけど……何が起こったか、全然覚えてないんだ」

「ボクも。いきなり目の前が真っ赤になって、気が付いたらエアームドがいなくなってる……」

二人共、何が起こったのか——リュウに至っては、自分が何をしたのかさえ覚えていないらしい。だがサジェッタは、それでいいと思っていた。今はまだ知らない方が、彼等にとって一番いいのだろう。多分。

到着場所を「エルドラクⅡブレイブ」基地前に設定し、リュウ達は「救助隊バッジ」を使って「ハガネ山」を後にした。眼前に広がる目映い光が収まって地に足がついたのを確認した時、突然リュウの立っている地面が盛り上がってきた。

「おおーっ！息子よ、無事に帰ってきたか、よかったよかった！」

そう叫びながら、リュウを跳ね飛ばして地面から顔を出すアイオン。こうかはばつぐん……である。

「おおっ、これはこれは先程のアチャモ殿！失礼した！」

「……アンタ、地面から顔を出す時もうちょい注意したらどうなさ？」

地面に墜落して頭を強打したリュウ以外、みんなが朗らかに笑った。

依頼の報酬を渡し、親子二人そろって改めて礼を言った後、アイオン達は再び地面に潜って自分の住処へ帰っていった。それを見送って——まるでアイオン達が帰るのを見計らったように——キトラが口を開いた。

「……それにしても酷いよね」

「酷いって、何が？」

リュウが顔を向けると、キトラはいつになく深刻そうな表情を作っていた。

「あのエアームド、自分がイオを攫ったのは慈善事業だとか言ってたじゃない。地震を起こしているのは彼らが暴れているからって。でも、ディグダ達が暴れたくらいでこんなに大きな地震は来るはずないんだよ」

「じゃあ……あの時エアームドが言ってた噂っていうのは……」

「災害で不安が募った誰かが流したんだろうな。ここのところ毎日のように災害が続いているから、とうとうその元凶を排除しようとする輩まで出てきたというわけか。そして今回、罪のない幼い子供が犠牲になりかけた……」

独り言のように言ったサジェッタの言葉は、リュウの心の奥底に深く沈んでいった。

救助隊というのは災害に巻き込まれた人々を救うために存在して

いるのであって、災害の元凶を根絶するというのは管轄外である。
エアームドのように「慈善事業」の名の下でその活動をするという
ことは、決して悪い行為とは言えない。だけど……

キトラ達と別れ、家に帰って眠りの世界に入るまで、リュウの頭
の中はそのことで一杯だった。本人は自覚していなかったのだが、
リュウはこの時、自分に何の関わりもないはずであったこの世界――
――「アナザー」について、初めて真剣に考えていたのだった。絶
えない自然災害、ポケモン達の動揺、それによって生じる様々な誤
解――自身もポケモンの姿となっている今、それら全てが他人
事のように思えなくなっていた。

時同じくして、サジェッタも星空を仰ぎながら、ぼんやりと物思
いにふけていた。もちろん、内容はリュウと全く違う。今日目撃
した緋色の炎を思い出しつつ、サジェッタにとって家族以上に大切
なヒトの面影を感じていた。

「全く思ってもみませんでしたよ……こんな形で、また貴方に会う
ことになるだなんて」

第六話 銀翼の鳥（後書き）

今回も戦闘描写が1ページ弱でしたー（殴
うう……一話分バトルシーンが描ける能力がほしい……

ようやくリュウの能力、緋の炎の登場です！

探検隊の主人公さんもこの頃にあの能力が発動してましたね、奇妙な偶然。

しかし、やっぱり学校始まると更新スピードが危うくなるな……何とかせねば；

とりあえず学校祭自重しろー、とだけ叫んでおきましょう（↑

第七話 様々な救助隊（前書き）

今回はあの救助隊達が続々登場！

原作設定通りに書けてるかが今一番不安に思っていることです；

第七話 様々な救助隊

また————あの夢だ。

頬を撫でる風、雲一つない青空、果てしなく広がる草原……昨晚も見た、限りなく現実に近い夢の中に、リュウは一人、ポツンと突っ立っていた。目に映る風景はあの時とほとんど変わらないけれど、唯一違っていたのは、昨晚の夢の最後に見た大きな木が、今回は始めから見えていること。そしてその根元に、誰かが座っているのはつきりと見えた。相変わらずハープを美しく奏でている。

もたもたしていたら、また夢が終わってしまうかもしれない。リュウは意を決して、巨木に向かって走り出した。先程まで頬を撫でていた風が、向かい風のように一層強く感じる。その風に乗って、ハープの音が、さらに歌が聞こえてきた。

走っているせいなのか、それとも遠すぎるのか、歌詞がうまく聞こえない。それでも耳に拾ったわずかな言葉が「人間」、「役目」であることを認識した瞬間、あの時の夢と同じように、眼前に映っていた景色に蜘蛛の巣のようなヒビが入った。景色がバラバラと崩れる中で、誰かが呼ぶような声が聞こえる————

「……ウ、リュウ！いつまで寝てんの！」

「うわあっ！」

反射的な叫びのおかげで、リュウの意識は現実に戻ってきた。藁葺きベッドのそばには、キトラが眉間に皺を寄せて、サジェッタが相変わらず眠そうな顔で立っている。

「あ、あれ？キミ達、なんでここに……」

「もうとつくに朝だよ！ここにボク等がいて当たり前でしょ？」

「俺より長く寝てる奴なんてお前が初めてだぞ……」

欠伸混じりのサジェッタの言葉で初めて、リュウは寝坊したことを認識した。夢の中では、そんなに時間が経ってないと思っていたのに。……夢だから当たり前か。

「サジェッタはともかく、リュウがこんなに長く寝てるなんて珍しいよね。お菓子食べ放題の夢でも見たの？」

「そんな夢見るキャラかい？オレは。……まあ確かに、変な夢は見ただけどさ」

「へえ。どんな夢？」

考えてみれば、夢のことをキトラやサジェッタに話したことはない。何か分かるとは期待していないけれど、話してみても問題はなだらう。リュウは二夜連続で見たあの夢のことを話した。

「……だっ広い草原の中にいて、大きな木の下で誰かがハープを弾いている夢？そんな夢を見たんだ………」

「うん。今回の夢はその誰かが何か歌を歌ってたんだ。歌詞はよく聞こえなかったけど、『人間』と『役目』というのだけは聞こえたような気がする」

「『人間』、『役目』ねえ………」

珍しくサジェッタが眠気を吹き飛ばしたような真剣な顔で、考えるように呟いた。正直、サジェッタが真剣に考えるようなネタだとは思っていなかった。

「確証はないが、ひよっとしたらその夢はお前の過去に関わってるんじゃないか？その歌を歌ってた誰かっていうのも、実はお前の知り合いだとか」

「あの夢が、オレの過去ねえ………」

そうだとしたら、なんだかオレの過去って平和っぽくないか？……そう思うリュウであった。

期待通り夢の正体に何一つ気付けないまま、とりあえずリュウ達はいつも通り依頼をこなすことにした。連続して依頼を三つも成功させてちよつとは有名になったかなと思いきや、相変わらずポストの中身はすっからかん。今日は掲示板の依頼をこなすこととなった。有名になる速度と依頼の増加速度は必ずしも比例しているわけではないのである。……反比例になるよりはマシだが。

救助の準備も兼ねて「サルベージタウン」を歩いていると、何やら広場にヒトだかりができていた。野次馬のざわめきに混じって、誰かが怒鳴っているような声も聞こえる。混み具合が比較的薄いところに割り込んで進んでいくと、ようやく声もはっきりしてきた。

「ダメだ！その程度で引き受けられるか！」

「でも……でも、どうしても助けてほしいのです！お願いします！」

……この会話だけでは、何が起きているのか見当もつかない。キトラはひとまず顔を真っ青にしているリュウに、断っているポケモンがよこしまポケモンのダーテング、懇願しているポケモンがわたくさポケモンのワタッコであることを説明した後、近くに立っていたハスブレロに気が付いた。

「バイラ、何があったの？」

「ん？ああ、キトラか。俺も今さっきこの騒ぎを聞いたばっかなんだがよ、どうやら救助の依頼みたいだぜ」

バイラと呼ばれるハスブレロは、どうやらキトラの知り合いらしい。「今さっき聞いたばかり」とは言いながら、状況把握が上手いらしく、丁寧教えてくれた。

「あのダーテングは救助隊『テングズ』のリーダーで、ガニメデっつー奴だ。名はそこそこ知れてるんだがよ、報酬が高くないと依頼を受けねえらしいんだ。んで、今ワタツコが救助を頼んでんだけど、報酬が安いって理由で断ってるわけ」

「そんな……いくらなんでも酷いじゃないか！ねえリュウ……って、あれ？」

キトラがリュウの不在に気付いた時、ガニメデの怒声が響き渡った。

「何だとテメェ！もう一度言ってみろ！」

「見た目いい年なんだから一回で理解してよガメちゃん。その……えっと、ワタツコ？がこんなに必死に頼んでるんだから、引き受けてやればいいじゃないか」

いつの間にかガニメデの口論の相手がリュウに代わっていた。その上から目線ぶりに大勢の野次馬が舌を巻く中、キトラが慌てて仲裁に入ろうとするが、ガニメデの怒鳴り声のせいでなかなかタイミングがつかめない。

「俺に上から目線で物言うとはいいい度胸だな。俺は救助隊『テングズ』のリーダーだぞ！あと名前はガニメデだ！ガメちゃん言うな！」
「似たようなものじゃないか。がめついいからガメちゃん決定。あと、こう見えてオレも救助隊なんだけど」

すると、リュウは目を逸らして独り言のように言った。

「……あ、オレ『も』っていうのは変かな。こんな大人げない救助隊くずれみたいなヒトと一緒にされても困るからなあ」

「なっ……何だとこのガキンちよがあ！」

怒り心頭に達したのか、ガニメデが団扇のような形をした右手を振り上げる。と、その時、その右手がいとも簡単に止まってしまった。

「……………そこまでだ」

ガニメデの腕をつかんでいたのは、ねんりきポケモンのフーディン。その後ろには、かえんポケモンのリザードン、よろいポケモンのバンギラスが並んで立っていた。その貫禄にガニメデはもちろん、別の原因だがリュウもその場で硬直してしまった。

「自分より弱き者に拳を振り上げるなどヒトとしても言語道断。況してや貴様は救助隊であろう？ 報酬が安い云々で依頼を断るとは……恥とも思わぬのか？」

話している言葉のトーンは普通だが、ガニメデの腕を握っている手には相当な力が込められていた。締め上げているような音がその証拠だ。止めに鋭い目でギロリと睨まれ、流石のガニメデも怖気づいたのだろう。

「ちっ……分かったよ、やりゃいいんだろ？ 行くぞ！」

フーディンの手を振り払い、部下であろう二人のコノハナを引き連れて、ガニメデは風のように早く走り去ってしまった。彼等の姿が見えなくなり、ワタツコがおずおずとフーディンに駆け寄る。

「あ、あの……ありがとうございます」

「礼はいい。また彼奴のことで何かあったら私に言え」

先程とは打って変わって、驚くほどの優しい口調に安心したのか、ワタツコの顔にも笑顔が戻った。静まり返っていた野次馬が、徐々にざわめき始める。

「すげえ……あのガニメデが一瞬で言うこと聞いたぜ……」

「流石ゴールドランクの救助隊だよ。憧れちゃうなあ……」

ヒソヒソ声ながら、フリーディン達に対する賞賛が渦巻く中、キトラとサジェッタは硬直しているリュウを起こしに行った。

「顔、きれいに紫色だな」

「リュウ、大丈夫？」

「あ？ ああうん。大丈夫大丈夫。オレなら大丈夫………」

呪文のように呟いていると、突然頭上が暗くなった。見上げると、フリーディンともに目が合ってしまった。叫びそうになる口を慌てて閉じる。

「その少年、怪我は？」

「や、や、大丈夫、大丈夫です……」

そうか、と言って、フリーディンは少し笑った。リュウの顔がなぜ引きつっているのかには興味がないようである。

「自分より図体が大きな相手にも怯まない、その勇気たるやよし。だが言葉には気をつけろ。あの時もし我々がいなかったら、どうな

っていたことか……」

「……す、すみません……………」

フリーディン達が行ってしまった後も、野次馬のざわめきは収まる素振りも見せなかった。「あとで友達に自慢しよう」とか「サインもらえばよかった」とか、半ばどうでもいいような言葉も聞こえるし、

「お前達すげえな！あの『FLB』と話すなんてよお！」

バイラに至ってはお褒めの言葉をもらう始末。サジェッタは無表情、キトラは苦笑しているし、リュウは何がすごいのかさえ分からない様子である。

大衆が大分バラバラになった後、リュウもようやく落ち着き、先程のフリーディン達についてサジェッタに教えてもらった。

「彼らは救助隊『FLB』。巷では有名な救助隊だ。司令塔であるフリーディンのフォルテを筆頭に、リザードンのレバント、バンギラスのバチスタで構成されている。本来彼らの本拠地はここよりずっと遠いんだが、救助隊連盟の招集命令で、しばらくここに拠点を構えるらしいな」

「ふうん……道理で威厳があるわけだよ」

「ボクも名前は知ってたけど、実際に見たのは初めてだよ。それにしてもカッコよかったなあ……………」

キトラが憧れで目をキラキラさせながら、思い返すように空を仰ぐ。

「ボク等も負けてられないね！依頼をたくさんこなして、一流の救助隊になるんだ！」

「そのためにも、まずはポストに依頼が来る程度まで頑張らなきゃね」

「……まったくだな」

三人そろって笑いながら、「エルドラックIIブレイブ」は依頼調達のため、「ペリッパ―連絡所」に足を運んだ。彼らを木の陰から見ながら、何か企んでいるように笑っている存在にも気付かず。

その夜。

「サルベージタウン」の南にあるサファリ地帯のはずれに、救助隊「FLB」の基地がある。昨今の招集命令で「サルベージタウン」に派遣されることが決まった時、ポケモン救助隊連盟からこの基地を貸してもらったのだ。彼らの実力だからこそその優遇である。

フォルテは物思いに耽っているような様子で、基地の真上にある切りたった崖から満天の星空を眺めていた。物言わぬ星々と、テレパシーで会話しているかのように。

「フォルテ、こんなところで何やってんだ？」

フォルテが振り向くと、そこにバチスタが立っていた。遅れてレバントも欠伸しながらのそのそと歩いてくる。

「……フツ、たまには星を見るのもいいと思ってな」

「おっ？ 知能指数五千のインテリさんがロマンチストな気分になっちゃって。明日絶対え何か起こりそうだぜ。くわばら、くわばら」

眠そうな顔から一転、ケタケタと陽気に笑うレバント。フォルテ

は怒ることもなく、小さく笑って再び空に目を移す。

「（……………ああ。確かに『何か起こりそう』だな）」

生まれてから世の中で起こった出来事を全て記憶できる頭脳でも、これから起こることは予知できない。ただ、色も形も分からない漠然とした不安が、今のフォルテの心で静かに渦巻いていた。

第七話 様々な救助隊（後書き）

案の定これでもかというくらいキャラの名前がわんさか出てきたな
……

設定集作りてえ……と思いながら描きかけの学校祭パンフの表紙を
睨む橘 紀です。

第八話 怪しい救助隊と「妖しい森」(前書き)

なんか雰囲気を出したくて、漢字表記を「妖しい森」にしてみました。

タイトルは狙ったわけではありません。……ほ、本当ですよ；

第八話 怪しい救助隊と「妖しい森」

ある日の深夜。「サルベージタウン」の東に位置するとある森には、夜行性であるふくろうポケモン、ホーホーとヨルノズク達の鳴き声以外何も聞こえなかった。皆自分の家で眠りの世界に入っている。そんな彼等を再び目覚めさせないよう、足音を忍ばせて森の中を歩く三つのヒト影があった。

「へへっ、リーダー、ひとまず作戦は成功だな」

「何ともあつけないねえ。まあ、よい子はぐっすり寝てるこの時間帯だから当たり前か」

「お前達、もうちょい音量下げて話せ。誰かに気付かれたら全てが台無しになるんだからな」

「ホントにありがとうございました！ 危ないところを助けていただいて……」

「そりゃ、危ない目に遭っているヒトを助けるのが救助隊だろ？ ま、キミも無事でよかったよ」

依頼主であるベロリンガからの感謝の言葉に、その姿にも臆さずニコニコと笑いながら返すリュウ。ここ数日「エルドラクⅡブレイブ」は、依頼も兼ねてリュウの「ポケモン慣れ」に専念していた。見ず知らずのヒトに会う度にビクビクしては流石に失礼なので、できるだけ様々な種族からの依頼を受けることでそれを克服しようというものだ。

リュウの物分かりの良さも手伝ってか、始めて一週間のうちに「サルベージタウン」の住人とも気軽に話せるようになり、さらに一週間たった今ではポケモンの基礎知識はともかく、初めて会ったヒ

トに対してもこのようにいつもの口調で話せる度胸もついた。キトラも一安心である。

「すごい上達っぷりだねえ。ヒト見知りっぽかったあの頃のイメージが大崩壊だよ」

「それ褒め言葉？あとヒト見知りっぽく振る舞ったことなんか一度もなかったけど」

報酬の半分を銀行に預ける間、リュウ達は談笑していた。今日は依頼も簡単なものだったので、まだ空の色は赤みすらかかっていない。

「それより、サジェッタまだ帰ってこないのか？」

「うん……さっき同じ『飛翔の森』に住んでいるヒトに聞いてみたんだけど、まだ誰も見てないみたい」

この日の朝、いつものようにキトラが「飛翔の森」へ迎えに行くと、サジェッタの姿はなく代わりに小さな紙があった。「野暮用があるから今日は二人で依頼をこなしてくれ」と書かれてあったという。

「でも、まだこんな時間だしね。夕方くらいには帰ってくるんじゃない？」

「……そうだといいいけど」

リュウはそう呟きながら、体内の熱を逃がすために小さく火を吐いた。夏がもうそろそろ近いということで、外は陽炎が見えるほど暑い。とりわけ炎タイプのリュウは、ヒト一倍汗をびっしょりと掻いていた。

サジェッタが戻ってくるまで、リュウとキトラは救助基地で待つ

ことにした。こんな暇な時間こそ、リュウの勉強にはもってこい。タイプ相性、状態異常等、ビギナーのポケモントレーナーが習うような知識をキトラから教わっていると、突然ドアを強く叩く音が聞こえてきた。

「リュウさーん、キトラさーん！」

聞き覚えのある幼い声も聞こえる。リュウがドアを開けると、

「あれ？キミは……トーチ君じゃないか！どうしたんだい？」

名前を思い出すのに少々手間取ったが、確かにそこにはトーチがいた。この暑い中全速力で走ってきたのだろう、全身に滝のような汗をかいていた。キトラが慌ててコップを取り出し、水を汲んでトーチに渡す。

「き、キトラさん……すみません」

「いいから。それより何かあったの？」

「は、はい！その……さっきまで、トランセルのフォトン君と遊んでたんですけど……フォトン君、森に入ったきり出てこなくて……」

リュウとキトラは目をさらに丸くして、互いの顔を見た。

その森は何て名前と尋ねても、幼いトーチには分からない。リュウが「アナザー」の地図を見せると、トーチは「サルベージタウン」近くの森を指し示してくれた。彼を助けた「小さな森」より、一回りも二回りも規模の大きな森。

「これは……『妖しい森』だね」

「『妖しい森』？」

「ただでさえ道が迷路みたいになってるのに、深い霧のせいで迷いやすい森と言われているんだ。毎年迷子が絶えなくて……」

何より怖いのが、「小さな森」よりも凶暴なポケモンが生息していることだという。フォトンが無事でいられる時間はそう長くはないだろう。言葉にせずとも考えは同じ。リュウとキトラは互いに頷いた。

「わかった、オレ達が捜してくるよ……って、あれ？」

振り向いた先に、トーチの姿はなかった。慌てて探してみると、門の前でトーチが三人のポケモンに取り囲まれているのが目に入った。

「おうおう、トーチ君。友達が行方不明なんだって？」

「その依頼、アタイ達が引き受けてやるよ」

「あんなチビ共よりずっと実力があるからな」

シャドーポケモン、ゲンガーを先頭に、めいそうポケモンのチャーレム、へびポケモンのアーボが一方的にトーチに話しかけている。案の定リュウにとっては見たこともないポケモン達だが、キトラに聞くのは後回しにしておいて、癩に触るのは今言った言葉だ。いきなり見ず知らずのヒトに馬鹿にされたら、流石のリュウでもイラッとくる。

「アンタ等ちょっと待て！いきなり出てきて何なんだよ？」

リュウの怒鳴り声に気付いた三人が、一斉にこちらを睨んできた。そのうちの一人――ゲンガーが、ずかずかと前へ出てくる。

「何って、困っているポケモンに救いの手を差し伸べてたんだよ。救助隊として当たり前のことだろ？」

「それは否定しないけど、トーチ君はオレ達に頼んでたんだよ？ アンタ等がやってるのは『救いの手』じゃなくて『横取り』だろ？」

「あらあら。かわいい顔して生意気な口きくわね、このボウヤ」

口を開いたのは、チャーレム。声の色からして多分、女性。リュウはドン引きして後ずさりしかけた足を根性で止めた。言い返そうとしたが、今度はアーボが口を開いて割り込んでくる。

「誰が行こうが助けたもん勝ちなんだよ、救助隊ってのは。それにさっき言った通り、『妖しい森』ってのはお前等の実力で拔けられるほど手ぬるい森じゃないぜ」

「さつきから実力がどうとか言ってるけど、キミ達何？ 救助隊なの？」

苛立ち混じりのキトラの質問に、ゲンガーが待ってましたと言わんばかりに答える。

「ケケツ、いかにも。俺達は救助隊『イジワルズ』だ。まさか知らないとは言わせないぜ？」

「知りません（ネーミングセンス悪いし）」

淡白に答えると、『イジワルズ』の三人は声高らかに笑い出した。トーチがこそそと三人の輪から抜け出し、リュウの陰に隠れる。

「俺等を知らないとは相当な世間知らずだな。ここらじゃ有名だぜ？ 世界征服を目指す正義の救助隊ってな！」

世界……………征服……………？

ゲンガーの言葉を最後に、辺りは気味が悪くなるほど静まり返ってしまった。「イジワルズ」の周りには「何がおかしいんだよ」、「エルドラクIIブレイブ」の周りには「アンタ等本気でそう言ってるんですか」というような雰囲気漂っている。

「ケケッ、何だ？怖気づいて言葉も失ったってか？」

「コメントに困っただけです。それで、『世界を制服で埋め尽くそう計画』を目論んでいる救助隊様が何の用？」

「酷え誤変換だな。それにさっき言ったろ？そこで困っているトーチ君とやらの救いの手を差し伸べてんだよ」

「こっちもさっきリュウが言ったでしょ？トーチ君はボク達に依頼してんだよ。横取りしないでよ！」

「やれやれ、低能相手だとどうも埒があかねえな」

いらだたしげに口を三角にして、ゲンガーが見下ろすようにキトラを睨む。傍からそれを見ていたアーボが、思いついたように首を持ち上げ、

「ゴラド、いいこと思いついたぜ」

耳打ちでゲンガー——ゴラドに何かを話した。一通り話を聞いたゴラドは再び大きく白い歯を見せると、片手でリュウをいとも簡単に弾き飛ばしてトーチの顔を覗き込んだ。赤い目ともろに合ってしまい、「ヒッ」とトーチが息をのむ。

「いいこと思いついたぜ、トーチ君。俺達とそこのチビ共が競争して、先にフォトン君を助けた方に報酬をあげるってのはどうだ？」

こちらの言葉を全く無視しての提案。キトラはもちろん、跳ね飛

ばされたリュウもすぐさま起き上がって抗議しようとしたのだが、「イジワルズ」の残り二名がさりげなく動いてリュウ達の前に立ちふさがる。

「で、でも……ぼ、ぼく、お金、持っていないです………」

ガタガタ震えながら強いて目を逸らし、か細い声で答えるトーチ。ゴラドは白い歯の奥で微かに舌打ちをしたが、すぐにまたニヤニヤ顔をトーチに向けた。

「大丈夫さ。お金ならあとで君のお母さんからたんまりもらうからね」

そう言うと、トーチの頭をポンポンと軽く叩き、またリュウ達の方へ顔を向けた。ギロリと睨むリュウ達を、あしらうかのようなニヤニヤ顔を浮かべて。

「そういうわけだ。さ、善は急げというし、さっさと行ってちゃっちゃと済ませちまおうぜ！」

ゴラドの言葉にチャーレム、アーボが「おー！」と威勢よく答えると、「イジワルズ」の三人は逃走中の小悪党並みのスピードで走って行ってしまった。

しばらくその後ろ姿を傍観していたリュウ達は、すぐに気を取り直して、救助の準備に取り掛かった。ただでさえ一方的な申し出、さらにリュウもキトラも売られた喧嘩は買うような性質ではないが、これほどまでにバカにされては流石にこちらのプライドが許さない。預けたばかりの道具を引き出し、さらにカクレオン商店で食糧などを何個か買い込んで、救助基地前でもう一度それらを確認する。

「リュウさん……キトラさん……」

トーチが心配そうにリュウ達を見つめる。ゴラド達の件もあって本当は怯えているはずなのに、そんな気持ちを押しつけてリュウ達のことを心配してくれているのだ。それならば、なおさら負けるわけにはいかない。

「大丈夫だよ。フォトン君はオレ達が必ず助けてやるから。だからトーチ君はここで待っていてくれよ、な？」

まだ不安を隠せない顔のまま、トーチが一つ頷いたことを確認すると、リュウ達は「サルベージタウン」の出口である門を抜け、「妖しい森」へと駆け出した。

第八話 怪しい救助隊と「妖しい森」 (後書き)

救助隊にも悪役キャラ登場！

こっちの方が茶目っ気あって紀は好きなんですけどね。

第九話 迫りくる二つの危機（前書き）

暇を見つけてはちまちまと書いてようやく投稿どつかーん！（↑
一応確認はしたのですが、もしかしたら誤字脱字があるかもしれません。

誤字脱字にピンときたら感想欄！よろしくお願いしますm（
m（

第九話 迫りくる二つの危機

今回の救助地点である「妖しい森」は、近くにある「小さな森」を経由しないと辿り着くことができない。地割れが起こった場所を除けば比較的平和そうなイメージの「小さな森」を抜けると、その雰囲気はがらりと一変した。夕暮れ時とはいえ、「妖しい森」は真夜中のように暗かった。「小さな森」と比べて規模が大きく、木々がひしめき合うように乱立しているため、一枚一枚の木の葉が太陽の光の一切を遮ってしまうのだ。そのせいか、どうも歩いているとジメジメとした空気を感じるし、そこら辺に生えているキノコが不気味さを一層醸し出している。

「うわ…………歩いてるだけなのに気分悪くなってきた……………」

「…フォトン君…………無事だといいいけど……………」

この不気味な雰囲気の中、幼い子供ならじっとすることもできないだろう。当てもなくうろろう彷徨ってしまったては、見つけるのにも相当苦勞してしまう。キトラは集中力の十分の九を耳に集め、木の葉の音に紛れているであろう子供の声を聞き取ろうと必死になっていた。リュウもキトラに倣って耳を澄ませつつ、足で叢くさむらを切り裂いて道を作りながら進んでいく。

「…………ん、何だ？ あれ」

鬱蒼と茂った叢を切り裂くと、何かがぞろぞろと動くのが見えた。キトラもすぐそれに気付き、リュウを引っ張って切ったばかりの叢に身を隠し、目を凝らしてその「何か」の正体を探る。

「あれは…………キノココだね」

「キノココ？」

「草タイプのポケモンだよ。危険が迫ると頭から胞子を吹きだして身を守るんだ」

そのキノココはかなり大規模な群れを作り、規則正しく列に並んで大移動を行っていた。真上から見たら、ちょうど大蛇のように見えるだろう。

「行こう、リュウ」

「へ、何で？」

「キノココの胞子は猛毒なんだ。ヘタに関わったらフォトン君見つける前に行き倒れになっちゃうよ。さ、早く行こう！」

キトラは妙にそわそわした様子で、リュウを引っ張って足を速めた。

キトラの耳がピクリと動いたのは、それからさらに一時間ほど歩いた後のことだった。確証はないが、トーチに似た子供の泣き声だったという。常人にはまず聞こえないその泣き声を辿るように走るキトラを、クタクタになった足に鞭打ってリュウは追いかけていった。

「うわぁ！」

突き破るように叢を抜けると、キトラが歓声を上げた。リュウは一先ず立ち止まって弾む息を整えた後、ようやく顔を上げる。

目に入ってきたのは、広さこそ違うが「小さな森」に似た草原だった。星空の下、夜風になびく下草を月明かりが照らす。穏やかな

夜風が草を撫でて奏でるBGMが、この場を一層神秘的な空間にさせている。今までの不気味な雰囲気が嘘だったかのように思える美しい風景に、リュウもキトラも思わず見入ってしまった。

「……って、感慨に浸ってる場合じゃないだろ！ フォトン君捜さないと！」

「う、うん！ そうだね！ ええと………」

再びフォトンの声を聞き取ろうとしたキトラの耳に、突如風を切るような音が飛び込んできた。

「リュウ、危ない！」

キトラがリュウに体当たりしたと思った刹那、今までリュウ達の間場所に飛び込んできた「それ」は大爆発を起こした。二人共いっしょくたになって転がり、もがくように立ち上がると、朦々と立つ煙の中に何かの影が見えた。その正体が確認できたきっかけは、正直聞きたくなかったあの声。

「ケケケケツ、ちょっと遅かったようだなァ！」

「……ゴラド！」

煙が晴れた先には、ゴラド率いる「イジワルズ」がそこに立っていた。チャーレムの傍には、蛹のような容姿をしたトランセルが、こちらから見ても分かるくらいにブルブルと震えながら佇んでいる。リュウとキトラは、全身に悪寒が走るのを感じた。

「そのトランセルは……」

「フォトン君だよ。案外あっさり見つかったな、とりあえず勝負は俺達『イジワルズ』の勝ちってとこだ。ケケツ！」

リュウは口の中で齒を食いしばった。ゴラドの高笑いが余計胃にキリキリ来る。このままフォトンを連れて引き上げていく彼等を見送らなければならないなんて、これほどの屈辱はない。キトラも同じ思いを噛みしめていることだろう。

しかし、何故か「イジワルズ」はなかなか踵を返さなかった。それどころか、フォトンをその場に残して、明らかに何かを企んでいるかのような笑みを浮かべながらこちらへ近づいてくる。

その真意にめずらしくリュウが気付き、咄嗟に息を吸って火球を放った。時同じくしてゴラドも、拳に秘めた邪悪な波動をリュウに向けて突き出す。互いの攻撃は過たず正面からまともにぶつかり、爆発音を残して煙と化した。

「ほほう、なかなか勘がいいじゃねえか」

「褒め言葉は結構。いきなり攻撃とは何様のつもり？ アンタ等の目的はオレ達より先にフォトン君を見つけることじゃなかったの？」

「まあそれも目的の一つだな。そしてもう一つの目的は………俺等の野望の障害になるお前等をコテンパンに叩きのめすことさ！ エーギル！」

ゴラドの言葉を最後まで聞き取らないうちに、リュウは背中に重い衝撃を感じ、叫ぶ間もなく顔から地面に叩きつけられた。チャレム——エーギルが気配を消して背後に回り込み、無防備なリュウの背中に“とびひざげり”をくらわせたのだ。

エーギルは膝でリュウを地面に押さえつけたまま、目にも留まらぬ速さでもう片方の足をキトラに向けて振るう。

「うぐ！」

不意を突かれたキトラはゴム鞠のように吹っ飛ばされ、力なく地

面を転がっていった。四肢を踏ん張ってブレーキをかけようとするが、キトラは止まるどころか今度は真上へ投げ飛ばされてしまった。

「ホホホ、ナイスよアセビ！」

キトラがいたはずの地面からは、アセビという名のアーボが顔を出していた。キトラが転がってくるルートを予知して、“あなをほる”で先回りしていたのだ。相性の悪い技をくらったキトラは反撃することもできず、なすすべもなく地面に墜落する。敵ながら、恐ろしいほどのチームワークである。

「くっ……離せ、離せ！」

リュウはエーギルから逃れようとしたばたするが、暴れれば暴れるほど強く押し潰されてしまう。首を動かして見上げれば、ニヤニヤしながら見下ろすようにリュウを見るゴラドの顔が目映る。

「最近有名になったとはいえ弱えなお前等。やっぱリーダーさんがいねえとダメってか？ ケケケッ！」

声も出ないほど押し潰されているリュウの代わりに、墜落のショックで気絶していたキトラが意識を取り戻し、ゴラドの言葉にすぐ飛びついた。

「な……な……どうしてサジェッタのことを………」

「流石にリーダーさんがいると厄介なんでねえ………今朝方、ちよつとした細工をしておいたのさ！ ケケケッ！」

その頃――――

「……っ、ここは……っ？」

目覚めた瞬間、サジェッタは身動きが取れないことに気が付いた。縄で十字に編んだ綱越しに夜の森が見える。夜まで寝過ごしたのかと思ったが、次第にサジェッタの脳裏に、昨晚の記憶が蘇ってきた。リュウ達と別れ、家路について眠りに付こうと思った時、いきなり目の前に黒い影が現れた。名を聞くのはおろか身構える間もなく、その影の目から何か波動のようなものが飛び出したと思った刹那、サジェッタの意識はそこで途切れた。“さいみんじゅつ”で眠らされてしまったのだ。

そして意識が戻った今、こうして自分は木から吊り下げられるように囚われの身になっている――――

ここまで考えて、何かの陰謀があると考えないバカはいない。リュウ達の身にも何かが起こっているかもしれない。サジェッタが足の爪を使って綱を切り裂こうとすると、下からざわざわと何かの声が聞こえてきた。

「な……キノココ……？」

サジェッタの真下には、先程リュウ達が目撃したキノココの群れが野次馬のように集まって、綱に囚われているサジェッタを見上げているのだった。不思議そうに眺める者もいれば、すでにビクビク震えている者もいる。

マズい……。恥ずかしいのと嫌な予感を感じ、サジェッタは急いで綱を切ろうとした。だが、それが逆にまずかった。爪を立てて暴れるサジェッタを見たキノココ達が、襲いかかってくるのだと勘違いし、一斉に護身用の胞子を吹きだし始めたのだ。

「(しまった………!)」

毒々しい色をした猛毒の胞子がサジェッタを包み込み、やがてそれはドーム状に広がっていく。翼で嘴を押さえるが、事前に息を吸い込んでいなかったため、すぐに息苦しくなってきた。しかも早く網を切ろうと気ばかり焦るせいで、息苦しさはさらに増していく。よりによってキノココ達は逃げる素振りも見せず、ただただ騒ぎながら胞子をまき散らしていた。

「(……………どうすれば……………!)」

普段は冷静なサジェッタも、この時ばかりは頭の中が真っ白になっていた。

「サジェッタに…………サジェッタに何をし……………うわっ!」

ようやく立ち上がったキトラは、気がつくとも既に身動きが取れなくなっている状態になっていた。アセビが“まきつく”でキトラを拘束したのだ。言葉が続けるはずだったキトラの口からは、か細い呻き声しか出てこない。

「キトラ……………ッ!」

助けに行きたくても行くことができないというこのもどかしさ。その反動もあってか、リュウが緋色の目を更に鋭くしてゴラドを睨みつける。よく見ると、ゴラドも似たような緋色の目をしていた。だがその内に秘められた意味はまるで違う。それぞれが今置かれている立場をそのまま映しているかのようだった。

「さて、やっぱフィニッシュはアンタが決めるかい?ゴラド」

「当然だ。さて、どんなふうにも甚振ってやろうかねえ……ケケケツ
」

ゴキゴキと鳴るゴラドの手は、リュウの火球を打ち消したあの波動が再び纏わりついていった。波打つようにうねうねと動く黒いオーラが一層不気味に感じる。そして、何かを決めたような笑みを浮かべ、邪惡な波動を纏った拳――“シャドーパンチ”を振り下ろした。

第九話 迫りくる二つの危機（後書き）

こういう危機一髪のところでは次回乞うご期待！というのが紀は大好きです。

……ああでも、紀の小説の場合期待はほどほどn（殴

第十話 ハンデよりフェア（前書き）

風邪治ったってのにいざ執筆しようとする地文が全くと言って
いいほど思いつかないorz
頑張れよ紀の貧弱な脳みそ（何

第十話 ハンデよりフェア

“シャドーパンチ”の風を切る音が聞こえた瞬間、リュウは機転を利かせて思い切り息を吸い込んだ。すると、

「うああつつつ！」

突然燃えるような熱さを感じ、反射的にイーグルがリュウを押し潰していた足を上げる。その隙にリュウはほぼ転がる形で脱出し、彼に当てるはずだった“シャドーパンチ”は火傷を負ったイーグルの膝に当たってしまった。

「いだっ！何すんによゴラド！」

「お、お前がいきなり足を上げるのが悪いんだろーが！」

ゴラドと口論するイーグルの足は、プスプスと煙が立つほどに焦げていた。ゴラドの“シャドーパンチ”が決まるその瞬間、リュウは吸い込んだ息を使って体内で発火させ、自分の体温を急激にあげたのだった。そしてあまりの熱さにイーグルが足を上げるのを狙って脱出しようと目論んだのである。目論見は見事に成功し、さらにリュウは体内で作った炎を、キトラを拘束しているアセビの胴体目がけて発射した。

「ぐあっ！……て、テメエ……あ！」

超高温の炎はアセビの胴体を焦がし、わずかながらキトラの束縛を緩ませた。キトラはすでにチャージしていた“でんきシヨック”でアセビを退け、フラフラした足取りながらも必死にリュウのもとへ走る。

「リュウ……大丈夫？」

「…キミを見てると、その言葉そのまま返したくなるよ」

“とびひざげり”で背中に大痣が出来たリュウに比べて、キトラは右頬にエーギルの蹴りで、腹部にはアセビの“あなをほる”で出来た痣。さらにアセビの“まきつく”がつくった圧迫痕など、相当な傷を負っていた。

何とかピンチは退けたが、状況はこちらに有利とは全く思えない。ヘタに動いたら、先程のようにすぐにまた危機に陥るだろう。あまり認めたくはないけれど、やはり人数が主な原因となっているような気がした。こちらが二人に対し、相手は三人。普通にかかって行ったら必ず残る一人に邪魔をされるし、だからと言って二人同時に相手できるほどの力はリュウにもキトラにもない。

「ど、どうするの、リュウ？」

「どうするって……とにかく少しでもアイツ等にダメージを与えなきゃ……このままじゃ……」

「へええ、じゃあやってみろよ！」

リュウ達が相談している隙を狙って、ゴラドが三発目の“シャドーパンチ”を放ってきた。避けきることのできないリュウ達は技を放って弾き飛ばそうとしたが、溜めていない上に疲れ果てていたせいでその威力は戦う前の半分にも満たなかった。黒い波動の塊はいつも簡単に炎と稲妻を掻き消し、リュウ達をはるか後方にある木に叩きつけた。

「そのザマになってもまだ俺等にダメージを与えるつもりかい？ ケケッ！」

「ぐ……くっ……」

木に激突したショックで足を痛めてしまった。あの技をあと一発くらったら今度こそおしまいだ。動かない体の中で唯一起動させることのできる脳をフル回転させて、この状況の打開策をリユウは死に物狂いで考えていた。

「む……………ぐ……………うう……………」

一方、囚われの身になっているサジェッタも、同じように頭の中で思考回路を巡らせて脱出方法を考えていた。猛毒の胞子は時を刻むごとにその濃さを増し、薄れる気配を微塵も感じさせない。口を閉じているだけでその胞子を防ぐことはできず、すでに猛毒はサジェッタの身体を少しずつ蝕んでいった。肺は火傷したように疼くし、目がかすんで自分の身体の輪郭さえも見えない。ついには体の節々まで痛むようになってしまった。

「（くっ……………『マスター』……………申し訳、ございません……………」

もう会うこともできない主に、心の中で自分の無力さを詫びたまま、サジェッタは自分の意識が少しずつ薄れていくのを感じた。すると、

「……………静まりし森の夜風、万物を斬り裂く刃となりて、彼に仇なす忌まわしき者を斬り刻め！」

朗々と響く言葉に答えるかの如く、突如として暴風がこちらに襲いかかってきた。色濃く渦巻いていた胞子は面白いように吹き払われ、あれほどこいたキノコの大群はあっけなく宙に投げ飛ばされていく。夜の森に似つかわしくない暴風はさらにその勢いを増し、さ

ながら鋭利な刃となってサジェッタを閉じ込めていたロープを切り刻んでしまった。

「うわっ……と」

すでに意識を取り戻していたサジェッタは、すぐに羽ばたいて地面への激突を免れた。しっかりと両足で軟着陸をし、翼を畳んで顔を上げると、ボロ布を纏ったポケモンらしきヒト影がそこに佇んでいた。

「……助けてくれたの、アンタか？」

「……………」

ヒト影は何も答えない。が、彼が助けてくれたという確証がサジェッタにはあった。ヒト影の周りに渦巻いている旋風がその証拠だ。風の刃で相手を斬り裂く“かまいたち”で、キノココ諸共胞子を吹き飛ばしてくれたのだろう。――あまりにも威力が強すぎて、とてもその技とは思えないのだけだ。

言葉を発する代わりに、ヒト影はサジェッタに向けて何かを投げつけた。右足で器用にキャッチして見ると、それは解毒作用のある「モモンの実」だった。これで胞子の猛毒を治せ、ということだろう。

「恩に着る。じゃ、俺は仲間を助けに行く。この借りはいつか返すからな」

「モモンの実」を口に含み、サジェッタは翼を一振りして夜空に消えていった。その姿を見送ったヒト影は小さくため息をつき、吐き捨てるように呟いた。

「何故“かまいたち”一発放つだけであんなやさしきことを言わねばならなかったのだ……我は」

“かまいたち”を放つ前に叫んだあの言葉が、彼にとっては恥ずかしいことだったらしい。しかしこうでもしなければ、“かまいたち”で敵を一掃するほどの威力を引き出せないのだ。ヒト影は密かに自分の体質を呪った。

「よし、まあこんくらいでいいだろ。ケケケッ！」

満身創痍のリュウとキトラを嘲笑うかのように、わざと大きな声で独り言つゴラド。その目の前には、自身より一回りも二回りも大きい“シャドーボール”が浮かび上がっていた。あれを発射して、背後の森ごとリュウ達を跡形もなく吹き飛ばすつもりなのだろう。

誰がどう見ても万事休す。避けなくてはいけないと頭の中でいくら叫んでも、身体は言うことを聞いてくれない。走る手段として使う足が全く使い物にならず、立つことすらままならないのだ。キトラの方も何とか四肢で立つことはできているものの、その腕や足はまるで老朽化した柱のように今にも崩れそうだった。

もう、おしまいだ………必死で思い浮かぶのを止めていたこの言葉が、打開策を考えている脳内を支配しようとしていた。ついに無意識的な現実逃避まで始めたのか、目の前に羽根がちらちらと舞っているが見える――――

「――――え、羽根？」

痛みを我慢して何度頭を振っても、次々と数を増して舞い落ちる光り輝く羽根。幻覚ではないということは、同じく羽根を見て狼狽えている「イジワルズ」を見れば明らかだった。

「な、何なんだ？この羽根……」
「ちよつとゴラド！“シャドーボール”が！」

エーギルに指摘されて見ると、なんとあれほど大きく膨らんでいた“シャドーボール”が、みるみるうちに小さくなってきているのだ。原因が何なのかも分からないまま、完全に消える前にゴラドが腕を前に突き出してそれを放つ。

主の手から離れて空を切っている間も、“シャドーボール”の縮小が治まることはなかった。その大きさはリュウから見て野球のボール、さらにピンポン玉くらいの大きさになっていき、眼前五十センチに到達する頃には、リュウ達ではなく“シャドーボール”自身が跡形もなく消えてなくなるという結果に終わった。

「この羽根……まさか……」

この場にいる全員が狼狽している中、いち早く核心に辿り着いたキトラが天を仰いだ。それと同時に、今まで見えていた羽根が一瞬にして細かな光の粒子となって消え失せる。

「やれやれ、何とか間に合ったか」

両翼でバランスをとりながら、サジェッタが空から舞い降りてきた。絶体絶命の状況下での救援にリュウもキトラも安堵の表情を浮かべようとしたが、着地早々くずおれそうになるサジェッタの姿がその行動を遮った。

「さ、サジェッタ、大丈夫？」

「……っ、解毒してもさすがにダメージは残ってるというわけか……」

「……………何の話？」

「話は後だ！とにかく目の前の連中を叩きのめすぞ！」

サジェッタが珍しく目の色を変え、乱暴な口調になった。その様子には驚かなかったと言ってしまうば嘘になるが、あえて気に留めず、リュウもキトラも再度身構える。人数が不釣り合いになる「ハнде」ではなく、三対三という真正正銘の「フェア」という状況が、満身創痍の身体を叱咤してくれていた。

「ケ、ケケケツ、じゃあやってみろよ！」

先程と似たようなセリフを吐くゴラドだが、実際に攻撃に出たのはエーギルだった。驚異的な脚力で跳ね上がると、空中で“とびひざげり”の構えをとり、重力に自分の体重をかけて落下してきた。毒のダメージが残っているにもかかわらず、サジェッタが前に出て翼を交差させ、それをいとも簡単に受け止める。

「な、何なんだい？力が入らない……………」

リュウを地面に埋めるほどの威力を持っているはずなのに、サジェッタをよろめかせないばかりか命中した時の音がなんとも貧弱だ。格段に攻撃力が落ちてしまい戸惑うエーギルを、サジェッタが溜息代わりにジト目で睨む。

「リュウの炎で火傷を負い、物理技の威力が下がっている……………それにさっきの羽根、覚えてないか？“フェザーダンス”。相手の攻撃力を地の底まで叩き落とす技だ……………こんな風にな」

サジェッタがエーギルの膝から翼を離した刹那、何かでずんぐりとしたものを斬り裂いたような鈍い音が響き、今度はエーギルが地

面に叩きつけられた。目にも留まらぬ速さの“つばめがえし”で止めを刺したのだ。

「呆然と見てる暇はないと思うけど！」

キトラの声が響くと同時に、銃声のような音を纏った閃光がアセビの身体を貫いた。“でんきショック”よりも威力の高い“10まんボルト”を真面にくらってよろめくアセビに、キトラ渾身の“でんこうせっか”が追い打ちをかけるように直撃する。

「く、くそっ……！」

一瞬にして味方二人が戦闘不能になったところを見たのもつかの間、ゴラドも危ういところでリュウの炎を避け続けていた。反撃しようにも、サジェッタの“フェザーダンス”で物理攻撃力を下げられ、ゴラドの持つ全てのゴーストタイプの技が使い物にならなくなってしまったのだ。足元に襲い来る炎をジャンプで避けると、目の前に何かがとびかかってきた。

「ぐあ！な、何だあ？」

リュウが繰り出した“すなかけ”がもろに目に入り、ゴラドがたたらを踏みつつ両手で目を覆う。その大きすぎる隙を、リュウが逃すはずはなかった。

「覚えといたほうがいいよ、ズルしてもどうせロクなことにはならないってことをさ！」

短い間に散々かつくらった鬱憤を混ぜて放った炎は、「ハガネ山」でも見た鮮やかな緋の色をしていた。リュウの感情に比例したかの

ように大きくなった緋の炎は、激流のようにゴラドを飲み込み、森全体を吹っ飛ばしてしまいそんな大爆発を起こして消えた。

もう真夜中であるはずなのに騒がしかった森が、ようやく静けさを取り戻す。「エルドラックⅡブレイブ」の三人も、時間が止まったように動かなくなってしまった。見るのは二度目であるはずの緋色の炎に対する驚き、激戦の疲れが主な原因として挙げられる。

「あ、あの……………」

静寂の中で声を出したのは、フォトンだった。激戦が余程恐ろしかったのだろう。目に見えるほど小刻みに震えていた。

三人ともその声で我に返り、リュウ以外はフォトンの方へ駆け寄った。なるべくフォトンを心配させないように、わりと普通の足取りで。

「キミがフォトン君だね。怪我とかはしてない？」

「ボ、ボクは大丈夫ですけど……その……あなた達の方が…」

「これくらい平気さ。ね、サジェッタ？」

「俺に同意を求めるな。今でも肩とか足とか痛くてしょうがないったらありゃしない」

ぶっきらぼうに言うサジェッタ。別に笑えるような要素はどこにもないはずだが、キトラとフォトンの顔からは自然と笑みが出てきた。

「さて、トーチ君が待ってるし、そろそろお暇しなくちゃね。リュウ、どうしたの？」

さつきから妙にリュウの声が聞こえないと思ったら、同じ場所でもだに固まっていたのだった。キトラに呼び掛けられ、ようやく出した言葉は、

「……サ、サナギが跳ねてる……動いてる……」

——まだ治ってなかったのか。

キトラの額に、漫画で見るような青筋が入った。

「救助隊バッジ」で帰ってきたリュウ達を驚かせたのは、そこに立っていたトーチだった。余程フォトンが心配なのか、門限を守らずにずっとここで待っていたのだろう。さらに輪をかけて、ボロボロになったリュウ達の姿が、トーチの心配を更にふくらませる結果となってしまうた。

「ち、ちょっとリュウさん、どうしたんですか？ そんなボロボロになって……」

「ま、まあね。色々あってさ……」

適当にはぐらかそうとしたが、トーチがそれで納得するわけがない。簡潔だが、これまでの経緯を代わる代わるに話した。無論、サジェッタの件はリュウとキトラをも驚かせたということは言うまでもない。

「……えーと、つまり、野暮用なんて真っ赤な嘘で、本当はゴラド達に誘拐されてたってことかい？」

「端的に言えばそうだな。……迂闊だった」

サジェッタがらしくもなく舌打ちした。相当怒っている証拠である。

「え……じゃあサジェツタ、キミの家に置いてあった書置きって……」

「書置きなんて書いた覚えはない。多分奴らの仕業だろうな。最初から俺達を潰すつもりであんな計画を立てたんだ」

「で、でも……ボク達、アイツらと会ったのは今日が初めてでしょ？ ガンつけられるようなことなんてしたこともないし………」

確かに、その通りだ。しかし戦う前にゴラドは、「俺達の野望の障害となる」と言っていた。もちろん世界征服なんて賛同する気なんかさらさらないが、なにもわざわざリュウ達だけを狙うというのはなんとも不可解な話である。そもそも、救助隊「イジワルズ」の野望は本当に世界征服なのか、まずそこから疑問に思ってしまう。

「ま、あんな奴らのこと考えたってしょうがないよ。それよりほら、トーチ君達を送ってあげよう。もうこんな時間だし」

リュウが提案した。言われてみれば今は、子供はすでに寝ている時間。トーチの母であるルースの説得も兼ねて、リュウ達はトーチ達を家まで送り届けてやった。案の定、これでもかというほどの謝罪の言葉をルースから浴びせられ、折檻くらっているトーチの姿を見届ける羽目になってしまったわけだが。

第十話 ハンデよりフェア（後書き）

中盤でサジェッタを助けたヒト影、勘のいい方なら「あ、ひよつとしてコイツかも」と思うかもしれません。

いつぞやの後書きでも似たようなこと言った気がしなくもないですが、感想欄にて言及は禁止！紀からのお願いですm（　　）m

第十一話 黙する谷に潜む怪物（前書き）

暗い展開警報発令じりりりり！！（↑

【暗い展開警報とは？】

- 一、その名の通り、解除されるまで暗い（シリアスな）展開が続きます。
- 二、書いている作者のテンションが低くなります。
- 三、「流血表現注意」タグが覚醒します（何
- 四、前書きおよび後書きからたまに作者が消失します。
- 五、感想欄にキャラが現れなくなる場合があります。
- 六、ただでさえ乏しいギャグがさらに貧相に（以下略

……書いてから思ったんだが、正直いらなかったな。この説明。

しかも今回は割とふつうな感じです。なんで今発令したんだこんな代物を。

まあ、これから暗い話が続くそうなので読む際は心の隅で御用心ください。

そして今回まさかの9ページ（汗

途中で切りたかったんですがっ！！これ以上話数増やしたらそれはそれで困る（強制終了

第十一話 黙する谷に潜む怪物

「『沈黙の谷』近辺、依然として無風の状態続く」――

今朝届いた新聞――巷では「ポケモンニュース」と呼ばれている――の一面は、この話題で占められていた。まあ、自然災害が続くこのご時世、このような異常気象や事故が新聞の一面を飾るなんぞ、もはや日常茶飯事であるのだが。

「沈黙の谷」はその名の通り、「妖しい森」からさらに北へ進んだ先にあるとても静かな谷だ。とはいっても、そこに住むポケモンがなかなかいないだけで、山から吹き下ろす風の音は流石に聞こえる。しかしここ最近、その風もピタリとやんでしまい、文字通り「沈黙の谷」と化してしまったようなのである。

別に今はこれといった大きな被害はないようなのだが、自然災害の前触れではないかと勘繰る専門家もいるらしく、現在複数のチームを派遣して調査中、とこの記事には書かれている。

「風が吹かない谷、ねえ……………」

特に意味もなく早起きしてしまったリュウは、キトラ達が来るまでの間、こうして「ポケモンニュース」を読んで時間を潰していた。人間世界の新聞のように四コマ漫画や社説といったようなものはないものの、「老若男女誰でも読める新聞」をコンセプトにしているだけあって、今日の運勢等のミニコラムもそれなりに充実している。――天気予報の適当ぶりには流石に舌を巻いたが。

「リュウ！起きてる？」

ドアを叩く音とともに、キトラの相変わらず元気な声が聞こえてきた。声を張り上げて起きてるよ、と返すと、程なくガラガラと戸

を引く音が響いた。

「おはよう、リュウ……って、何読んでるの？」

トコトコ歩いて部屋を横切り、キトラはリュウが広げている「ポケモンニュース」を覗きこんだ。

「おっ、『ポケモンニュース』だね。どれどれ、今日の『サルベージタウン』の天気は……」

「その日の気分で変わる天気なんてアテになるかい？」

「冗談だよ。予報士のポワルンのことだからきつと今日も晴れだね。それより、その一面は……」

やはり、キトラもあの一面に気が付いたようだ。キトラに「ポケモンニュース」を渡すと、熱心に目で文章をなぞり始めた。例のごとく眠そうな顔のサジェッタも、キトラの肩越しに記事を眺める。

「やっぱり、まだ風が吹いてないんだね。『沈黙の谷』……」

「さすがに三カ月あの状態じゃ専門家も騒ぎだすわけだ」

三カ月前と言えば、「ハガネ山」で救助したあの日に近い。確かに、それほど長い期間風が吹かないのであれば、専門家でなくとも何かがあったと思っても不思議ではない。

しかし、その解決策を打ち出す術など、当然のことながら今の「エルドラックIIブレイブ」にはない。彼等にできることは、いつも通り救助の依頼を受けて、災害の被害者を少しでも減らす、ただそれだけだ。

「ポケモンニュース」を棚にしまい、早速リュウ達は外へ飛び出した。最近ポストに来る依頼も徐々に増えて来たものの、今日は珍しくポストの中は「ポケモンニュース」しかなく、駆け出しだった

あの頃の思いを噛みしめながら「ペリッパ―連絡所」へ向かうことにした。すると、

「あ、あのう……………」

玄関に続く石畳の道の上に、誰かが立っている。頭、さらには両腕に綿毛を生やしたその姿にはリュウ達にも見覚えがあった。

「ええっと、救助隊『エルドラク＝ブレイブ』の救助基地は、こちらでしょうか？」

「そうだよ。確かキミは……………」

「ワタツコのフォンと申します。先日の折には、そのアチャモさんに助けていただいて……………」

フォンの言葉の後半で、リュウ達はやっと思い出した。「サルベ―ジタウン」の広場で、救助隊「テングズ」に救助依頼を申し込んでいた、あのワタツコだ。思い返せばあの時、リュウはワタツコをかばって上から目線でガニメデと口論したのだった。

「あの時は本当にありがとうございました」

「たいしたことはしてないよ。それで、今日はどうしたんだい？確かガメちゃんに救助をしてもらったんじゃない？」

「はい。そのガメちゃ……………あ、ガニメデさんのことなんです、救助に行ったきり戻ってこなくて……………」

えっ、という声を漏らし、リュウ達はそれぞれの顔を見た。なんでも、フォルテに促された効果もあってか、ガニメデはちゃんと救助に出かけたらしい。が、あれから数週間経っても、何の音沙汰もないのだという。

「……そもそも、お前はガニメデに何を頼んだんだ？」

「私達ワタツコは、風に乗って世界各地を旅しているのです。ですが、『沈黙の谷』付近を飛んでいた時、急に風が止んでしまつて……妹が、谷底に落ちてしまつて……」

「ち、ちよつと待って！『沈黙の谷』って……！」

今さっきまでリュウ達が議論していたキーワードではないか。

「はい。私は何とか谷を渡り切つて、その時に『沈黙の谷』の異常気象について聞いたのです。私一人じゃ、どうにもできなくて……」

いろいろと情報を集めていくうちに、救助隊「テングズ」のリーダー、ガニメデなら両手の団扇で強風を巻き起こすことができるという話を聞き、その力で妹を助けてもらおうと、高額報酬でないと引き受けてくれないことを承知の上で、あの日広場で頼み込んでいたのだという。

そんな事情があるにもかかわらず平然と断り続けていたガニメデには全く腹が立つが、今はそう思っている場合ではない。リュウとキトラはほぼ同時にサジェッタの顔を仰いだ。

「エルドラクIIブレイブ」のリーダーは、一瞬困ったような顔をした後、ため息混じりに言った。

「二人してそんな顔で見るな。行くに決まつてるだろ？」

断られるとは微塵も思っていなかったが、反射的にリュウもキトラもガッツポーズをしてしまった。そうと決まれば善は急げ。銀行からある程度の金を引き出し、その金で食糧などを買い込み、ついでに倉庫からもいくつか道具を引き出して、手早く救助の準備を済ませた。

「沈黙の谷」付近は切りたった岩山がいくつも連なってできた険しい地形で、普通に徒歩で行くとなると早朝から行っても着いた頃には日が暮れているという事態にもなりかねないので、フォンの案内の下、サジェッタに乗って空から行くことにした。「三人も乗せたら疲れる」とサジェッタはゴネていたが、救助のためには致し方ない。

フォンの妹——名はパラムというらしい——が落ちた地点は、広大な谷のちょうど真ん中あたり。風に乗って旅をするワタツコは体重が軽いため、落ちて怪我をすることは無いだろう。しかし、彼女がこの谷に落ちてから約三カ月。無事である確率は必ずしも高いとは言えない。しかも、ミイラとなってしまうたミイラ取りも探すとなると、やはり今回も容易に達成できる依頼ではないようだ。

「ひゃああ、地面に立って見てもすごい谷だね。下が真っ暗だよ」

崖から落ちないよう細心の注意を払って、キトラは谷底を覗いている。リュウも倣って覗き込もうとしたが、やめた。顔を下に向けてただけでも目眩がする。もともと好奇心旺盛ではないサジェッタは、しきりに翼で肩をポンポンと叩いている。フォンなんてほぼ乗っていないようなものだし、リュウとキトラ、どちらもそんなに重くはないはずなのだが……

「さて、この下にいるんだな。アンタの妹さん……えっと、パラムだっけ？」

「はい、よろしく願います……」

何故か先程から、フォンは小刻みに震えている。高いところが苦手なのだろうか？ いや、風に乗って空を飛ぶワタツコが、高所恐怖症では近所も飛び回ることができない。

「…なあ、なんでそんなに震えてるんだい？」

いい加減気になったのか、リュウが聞いてみた。

「え、ああ……これはあくまで風聞なのですが……なんでも昔からこの『沈黙の谷』の奥底には、ものすごく恐ろしい怪物が潜んでいるという噂があつて……」

「か、か、か、怪物うううっ！」

怪物云々より、キトラの驚きぶりがリュウとサジェッタの胆を潰した。当の本人は、黄色に混じることなく真っ青な顔になっている。

「も、もちろん、あくまで噂ですよ？でも、ガニメデさんも戻ってこないし、この異常気象だし、ひよっとしたらその怪物が関係してるんじゃないかと」

フォンが慌てて取り繕うが、今のキトラには効果がないみたいだ。ポケモンを見る度に衝撃を受けていたあの頃のリュウのように固まってしまうている。サジェッタはやれやれと首を振り、硬直しているキトラの尻尾を足でつかむと、一羽ばたきで空へ舞い上がった。

「まあ、その怪物とやらが出てこないことを祈りつつ行ってくるよ。じゃあな」

「え、お、おい！ちょっと待ってくれよ！」

足にキトラをぶら下げたままゆっくりと下降していくサジェッタに、リュウは慌てて飛び乗った。

「……ねえ、ここだけの話、今日は帰らない？」

「バカ言うなよ。っていうか、何で怪物って言葉だけでそんなにビクビクしてるんだい？」

「昔からキトラはお化けとか怪物とか嫌いだからな……おっと」

サジェッタが右へ旋回し、対岸にいる蜂型のポケモン、スピアーの放った“ミサイルバリ”を軽々かわす。怯えているキトラに代わり、リュウが火球を放ってスピアーを撃墜した。

「だって怖いじゃん！ボクなんか食物連鎖ピラミッドの底辺だから、ヘタしたら食べられちゃうよお！」

素で怖がっているキトラに対し、リュウは本気でツツコミに困った。強いて言うなら、食物連鎖ピラミッドの底辺は植物か微生物です……くらい。

「今怖がっているようじゃ後先大変だぞ？ほら、キトラの後ろ……」

「え……ちよ……うわああああ！来ないでええええええ！」

キトラが電撃を放った先には、怪物——ではなく、背後から超スピードで迫ってきたうすばねポケモンのヤンヤンマがいた。あと少しでリュウ達に奇襲をかけられるというところでキトラの電撃で仕留められ、サジェッタより先に谷底へ落ちていく。

「ふう……もう！おどかさないでよ！」

「こうでもしないと動かないだろ？……尻尾から電撃を撃つ程度に配慮できる余裕があるなら問題ないか」

キトラのためとはいえ、サジェッタ、仲間に対しても鬼だ。ちなみに、何故尻尾から電撃を放ったのかというと、いつも通りに放電

してしまうとサジェッタやリュウに感電してしまうからである。

その後も、相変わらずキトラは怯えているし、途中、“あわ”で遠距離攻撃を仕掛けてくるおたまポケモンのニョロモや、ポケモンが種族によって個々に備えている能力である特性、「もらいび」でリュウの炎技を吸収してしまうダークポケモンのデルビルなどには手を焼いたが、「エルドラクⅡブレイブ」は順調に谷底へ下降していった。風が吹かないという異常気象のせいか今日は曇り空で、そこへ降りれば降りるほど少ない光源が遠のき真っ暗になっていく。こんな状態でポケモンに襲われたら太刀打ちできないが、ようやくキトラが大分落ち着いてきたので、彼には気配を探る役一本に徹してもらった。

ついに辺りが完全に真っ暗になった頃、下から突き出されるような感覚がした。サジェッタの足が地面に着いたのだ。まずキトラが降り、手探りで道具箱から松明を取り出し、それをリュウが火を噴いて灯す。光の範囲は半径五メートルほどしかないが、それでも辺りを探るには十分すぎた。谷底の空間を数歩歩いては見回し、ヒトの気配を探る。すると、

「……誰だ？」

静かに、それでいて針を飛ばすようにサジェッタが言い放つ。リュウもキトラもサジェッタの視線を負い、身構えた。キトラの持つ松明の火に照らされたシルエットが、徐々に色を帯びていく。

そこにいたのは、ボロボロになったワタツコだった。

「パラムさん！」

まだパラムであるという確証はなかったが、気がついたらリュウはそう叫び、覚束ない足取りでこちらへ向かってくるワタツコのもとはと駆けて行った。

「あ、あなたは……」

「救助隊です。……パラムさんですか？」

「は、はい。そうですが……なぜ、私のことを……?」

怯えているのか、意識を失いかけているのか、パラムの目は焦点があっていないように見えた。

「キミのお姉さんから依頼されたんだ。酷い怪我してるようだけど、大丈夫かい？」

「私は大丈夫です。でも……あのダーテングさんが……」

「リュウ、危ない！」

パラムの声をかき消すように、キトラの叫び声が響く。と、次の瞬間、リュウはパラム諸共突風に吹き飛ばされてしまった。後ろから吹いてきたあたり、サジェッタが巻き起こした風だろう。何すんだよと起き上がるなり言おうとしたのだが、突然さっきまでリュウがいた場所に、巨大な稲光が落ちてきたのだ。

「うわあああああ！」

その衝撃波に近場にいたリュウはもちろん、比較的遠くにいたキトラやサジェッタまで吹っ飛ばされた。傍らにパラムがいる状態で頭から地面に激突したリュウ。頭を振って顔に付いた砂埃を払っていると、妙に頭上が明るいことに気が付いた。

「……………あれは……!」

そこにいたのは、激しい電撃を放つ巨大な鳥——サンダーだったのだ。黒く縁取りされた鋭い目、長く鋭い嘴、黄金に輝く前羽と

黒光りする後羽を重ね合わせた羽で羽ばたき、そこから絶え間なく放たれる稲光が、この空間を昼のように照らしていた。

姿だけでも圧倒されるが、リュウ達を驚かせたのはそれだけではなかった。ゆっくりと羽ばたくサンダー。その足元に、行方不明となっていたダーテング――ガニメデがいたのだ。

「ガメちゃん！」

後先考えず駆けだすリュウだが、案の定、またしても巨大な雷に阻まれてしまった。

ガニメデはサンダーの足に拘束され、ぐったりとしていた。顔と背を覆う白く長い体毛は、ところどころ赤く染まっている。単に襲われたのか、それともパラムをかばったのか、今では知る術すらない。

サンダーは見下ろすようにリュウを見、さらに大きく羽ばたきだした。これ以上稲妻と爆風に巻き込まれないよう、リュウはパラムを連れて大きく後方へジャンプし、サンダーから距離をとる。「エルドラクⅡブレイブ」は眼中にないのか、サンダーはガニメデを捕らえたまま天空へと舞いあがり、そのまま漆黒の彼方へ姿を消した。

「リュウ、大丈夫？」

再び真っ暗になってしまった空間で、キトラの声が響く。どうやら先程の稲妻で、松明も吹き飛ばされてしまったようだ。

「オレは大丈夫だよ。パラムさんは？」

「私も……大丈夫です」

「全員無事か。全く……とんでもないことになってしまったな……」

独り言のように呟くサジェッタ。リュウも、キトラも同じ思いを

抱いていた。単なる救助のつもりが、まさかこんなことになってしまったなんて……

「救助隊バッジ」を使って地上に戻ると、「サルベージタウン」は祭りのような騒ぎになっていた。頭上を飛び交うペリッパ達花落としていく紙を、みんな手に持って大騒ぎしている。

リュウは地面に落ちた紙のうち一枚を頂戴して、ひとまず救助基地に戻ろうかとキトラ達に提案した。こんな騒がしい中では、状況把握すらままならない。

ペリッパ達が落とした紙は、「ポケモンニュース」の号外だった。紙を広げた瞬間、一面を飾っていた見出しに一同目を奪われた。

「『沈黙の谷』にて、伝説のポケモン、サンダーの存在を確認」

リュウ達が見た出来事全てが新聞一面に掲載されていた。「沈黙の谷」を調査していたチームの一人が目撃したらしい。さらに、サンダーの放電で、一人重傷を負ったということも書かれていた。

隅に書いてあるミニコラムで、サンダーとはどのようなポケモンなのか詳しく書かれてあったので、例のごとくリュウが誰かに聞く必要はなかった。それにしても、やはりフォンの言っていた怪物とは、サンダーのことだったのだろうか。

「パラム！」

ちょうどいいタイミングで、フォンが救助基地に飛び込んできた。パラムも、一度姉の姿を目撃するなり、姉さんと叫んでフォンにひとつ飛びで飛びつく。

「パラム、酷い怪我……」

「このくらいなら大丈夫よ。でも、ダーテングさんが……」

一瞬にして沈んでしまったパラムの顔を見、フォンはキョトンとした顔でリュウ達の方を仰ぐ。リュウが代表して、「沈黙の谷」で起こったすべての出来事をフォンに話して聞かせた。

「ガニメデさんが……サンダーに、連れ去られた………?」

「あのヒト………ガニメデさん、私をかばってくれたの。必死に戦っていたんだけど、サンダーの雷で………」

パラムが怯え顔ながら、まだ続けようとしたのだが、突然ドアを叩く音が聞こえてきた。開けるのも面倒くさいのか、入っていいぞとサジェツタが答える。引き戸を半ば強く開けて入ってきたのは、

「え……『FLB』!」

余程驚いたのか、キトラの声は酷く裏返っていた。当然だろう。巷でも指折りの敏腕救助隊である「チーム・FLB」が目の前にいるのだから。

「ど、どうしてここに?」

「先程現れたサンダーの件についてお前達が話しているのを小耳に挟んだものでな。………今の話、本当なのか?」

盗み聞きと言ってしまえばヒト聞きが悪いが、今はそのことについて言及している場合ではない。リュウが一つ頷くと、「FLB」リーダーのフォルテは一瞬目を大きく見開き、何かを考えるように顎に手を当てた。

「伝説のポケモン、サンダー……『沈黙の谷』で、長らく眠りについていたと聞いていたが……」

「ガニメデが起こしちゃった、ってことですか？」

キトラの問いに、フォルテはゆっくりと首を振った。

「おそらく、そうではないだろう。お前達も存じているように、この一か月の間、『沈黙の谷』は長らく風が吹いていない状態であった。そもそもそれ自体が異常なのだ。崩れだした自然界のバランスが、彼奴の眠りを少しずつ妨害していったのだろうか」

さすが知能指数五千を超えるだけあって、ずいぶんときめ細かな分析をしている。

「眠りを妨げられ、サンダーは怒りで我を忘れている。しかも今回に至っては、あのダーテング……ガニメデといったか。あれを連れ去ったということは、恐らく眠りを妨げた張本人と誤解したのだろうか。生きて帰しはしないだろう……」

思わず、と言ったところか、パラムは両腕の綿毛に顔をうずめて俯いてしまった。性格はどうあれ、ガニメデが彼女を守ったことは紛れもない事実なのだ。命の恩人の身を案じるのは当然だといえる。

「やるのか？ フォルテ」

リザードン——レバントが問うた。文として成り立ってない質問だが、やはり同じチームメイトだからか、フォルテは意味を理解しているようであり、一つ頷く。

「危機に瀕しているヒトを救う。これこそが救助隊の使命だ。相手

が伝説のポケモンであろうと屈するわけにはいかぬ。ガニメデを助けなければ」

まるでその返事を待っていたかのように、レバント、ついでバンギラスのバチスタも頷き返した。すると、

「……オレ達も、行きます」

リュウの低い声が、瞬時にこの空間を静めた。「チーム・FLB」はもちろん、同じチームメイトであるキトラやサジェツタでさえも、驚きの顔でリュウを見る。

「オレ達も救助に行きます、ガメちゃんを助けに」

先程より強めの声で、リュウは改めて言い放った。フォルテはわずかながら瞳孔を小さくしたが、やがて一つ、息を小さく吐く。

「確かに、お主等も救助隊だ。今私が言った言葉を、そのまま遂行する権利はある」

しかしな、と、フォルテは間髪入れずに続けた。

「先程も言ったとおり、サンダーは伝説と称されるポケモンだ。お主等の實力を見下しているというわけではないが、並大抵のポケモンで勝てる相手ではない」

声の調子はそのままだったが、何か覇気のようなものが、リュウを圧倒しようとしているようだった。傍で見ているキトラもそれを感じたのか、生唾を一つ飲み込んだ。

リュウはすぐには何も言い返さず、しばらく静寂がその場に居座

っていた。睨んでいるようなリュウの目を、フォルテは確かめるように見続けている。

やっと、リュウが口を開いた。

「だけど、それでも助けに行きたいんです。『沈黙の谷』でアイツが攫われるところを、オレ達はこの目で見ました。だからこそ、命の危機に瀕しているアイツを見過ごすわけにはいかないんです！」

キトラはこの時一瞬、目の前に移っているリュウは別人ではないかと疑ってしまった。今まで救助をしようにも、気怠そうな顔を見せずとも、自分から進んで行くことなんて滅多になかったのに。

リュウが力強く言っても、フォルテは瞬きさえしなかった。が、しばらくすると組んでいた腕をほどき、目を閉じて頷いた。

「わかった。そこまで覚悟があるならば私は止めぬ。その二人も同じ思いか？」

フォルテの視線がリュウからキトラとサジェッタに移る。キトラは慌てて頷きながら二つ返事したが、サジェッタは答えなかった。いや、何の反応も示さなかったのだ。ただずっと、口を半開きにして、驚きの目でリュウを見ている。

「サジェッタ、どうしたの？」

「……えっ、あ、ああ………」

我に返った反動で、サジェッタは曖昧な声を漏らした。フォルテはそんなサジェッタを横目で見ていたのだが、やはり詮索は好まないのだろう。すぐにまたリュウと向き合った。

「決まりだな。しかし、今回の救助はチーム毎に行こう。合同だと

効率が悪いし、サンダーの強さは計り知れんからな。しっかりと支度をしてから行った方がよい」

「分かりました」

互いにしっかりと頷き、救助隊「FLB」は「エルドラクIIブレイブ」基地をあとにした。フォンとパラムもまだガニメデの身を案じつつも、しっかりとリュウ達に声援を送り、「サルベージタウン」へと飛んでいく。残った「エルドラクIIブレイブ」はしばらくの間、誰も口を開こうとしなかった。話の口切りの言葉が見つからなかったからである。

「……なんか、オレが勝手に決めちゃった内容みたいになっちゃったけど……」

ようやく口を開いたリュウの言葉は、明らかに気まずそうだった。彼がこの救助隊のリーダーだったらまだ許されるだろうが、所詮は平社員。人間社会なら折檻ものである。

「ううん！ボクだってきつと同じこと言ったよ。ね、サジェッタ」

「なぜ俺に振るんだ？というか、さっきまで怪物だと言ってビクビクしてた奴が何言ってるんだか……」

「で、でもでもっ、結局ポケモンだったんでしょ？そうとわかれば怖くなんかないもん！」

地上に戻ってこの方漂っていた張りつめた空気が嘘だったかのように、救助基地内で賑やかな笑いが起こった。これからの救助とは一切無関係のような、和やかな雰囲気が漂う。

危機に瀕しているヒトを救う。フォルテも言ったように、これは救助隊の義務、果たさなければならぬ使命なのだ。リュウ達「エ

ルドラク「ブレイブ」もまた、その使命にしたがったまで。

だが、この救助隊として当然の決断が、彼等の運命を大きく狂わせることとなる――

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3568w/>

ポケモン救助隊 エルドラク=ブレイブ ～緋龍の勇者～

2011年10月19日01時59分発行